草履道

井本正弘

それまで野も山も、田も畑も、泥んこであったが、砂塵が立って乾いた道に変わると、待ちに待った春が訪れる証拠である。

小林一茶　蝶とふや　信濃の奥の　草履道

目次

一、遭遇
二、ＳＫＤ〔松竹歌劇団〕
三、寿司屋
四、成熟
五、新しい道
終章

一、遭遇

「あのう、角帯って、どう締めるんですか」
美香は、唖然とした。その男は、羽織、袴姿だった。
口髭を蓄え、長身で、スリムな体形なので、着物はよく似合っていた。
美香は、郊外のMデパートの和服売り場で、パートタイマーをしている。
お昼時で、店内は混み合っていたが、向こうから歩いて来たその男は目立っていた。
何しろ、その姿だ。
美香はその時、常連客と対応していたが、和服売り場に向かって来るその男を、脇目で眺めていた。
「角帯は、浴衣用ですのん」と、大阪訛りで訊いた。
「ええ、浴衣は何着も持っていますが、いつも兵児帯ばかり締めていますので」
「兵児帯もええんですけど、お客様なら、角帯がお似合いやと思いますが」
試着室で、美香は大島紬を持ち出し、締め方を教えている。
「荻さんとおしゃるんですね。あなたの結城紬もよく似合っていますね。それに着こなしもお上手ですね」
褒められた美香は、その男の名前を聞きたくなった。
「お客さまのお名前は？」
その男は、トレーシングペーパーを二つ折にして、自筆で、カリグラフィペンで書かれた名刺を差し出した。
その名刺には、「一級建築士、中条修、Ofice OMU」となっていた。
その下に「phone 090 2311 8070,Email omuken@w5.dion.ne.jp」と書かれていた。
「今日は、パーティか何かですか」
「ええ、私が設計した、松濤のマンションの竣工式に出ましたので」
その男に、なぜか美香は、惹かれていた。
「いつもお仕事でお忙しいでしょうが、お電話しても、ええですか」
「ええ、ぜひ、ゆっくりとお話したいですね」
和服売り場の窓から、夕闇が迫る富士山が、茜色に染まり、初冠雪が逆行を浴び、きらきらと輝いていた。

デパートの大通りには、ジングルベルが響いている。
和服売り場に立った美香は、梅色の江戸小紋の着物を着け、板引杢染めの帯を締めている。
ある常連客が来て

「荻さん、その帯は、夏物ではないですか」
「ええ、よくお知りはって。実は、わざと何ですの」
「流石ですね。センスがいいんですね。私も見習おうかしら」と言いながら、帯締めを一本買って、ご機嫌よろしく帰っていった。
ふと見ると、髭顔の男が、美香を見詰めていた。中条だった。
彼は、以前会った時から、打って変わった姿をしていた。
バイオレットのカシミアのジャケット、シルクのブラウスにスカイブルーのベストを着け黒のパンツ、頃のエナメルパンプス、それにパープル調のボータイをつけている。
「あら、いらっしゃいませ、どこかにお出かけはったの」
「ええ、この上のフロアで、仲間同士の打ち合わせがありまして」
「打ち合わせですか。でもそんなお洒落して」
「ありがとう。でもこれは私の仕事着ですよ」
美香は信じられない。仕事着で、ボータイなんて。
「荻さん、お仕事が終わったら、そこらで……」と言って猪口を上げる仕草をした。
美香の夫、俊太がいつもより早く帰るといって、出勤していた。
早くとは、十時頃。美香の退社時間は七時と定められている。十時に夫が帰るなら、食事の準備時間は一時間は掛かる。美香の職場は自宅から歩いて十三分程のところにある。とすると、飲んでいる時間は、二時間弱となる。

美香は、日本酒、一本槍の口である。和食は当然として、イタリアン、フレンチでも日本酒を所望する。
デパートのすぐ近くにわいわい横丁があって、そこに焼き鳥屋がある。
中条は、そこに誘った。思わずの店だった。
その焼き鳥屋は、カウンター席だけしかない。酒は猪口でなく、グラスで出る。
美香は、座るなり、熱燗をグイッと煽った。
「いける口ですね」と言いながら、中条も三口で飲み干した。
焼き鳥屋といっても、ちょっとしたお摘みも出される。
美香は、煮込みを頼み、それに七味唐辛子をぶち込むように入れ、お椀を持ってかっ込んだ。唐辛子が効いたのか、咳が数度も出た。それを横目で見ていた中条は、美香の背中を何回も摩った。どうやら、咳が止まったようだ。
「失礼しました。私って、せっかちのものですから」
美香の大阪訛りは、販売用として使っている。
「美香さんとこうして飲んでいると、仕事も何も忘れそう」と言いつつ、左手を膝の上に伸ばす。
そんなことは、慣れっこだった美香。何しろＳＫＤに出演していて、お客さんに呼ばれ、

酒を飲まされ、男に膝や尻を触られたことが幾度もあった。
右手で中条の手を、美香は強く握り返した。中条も何ら動じず、酒を口に運んでいる。
その時、中条は、突飛なことを平然と言った。
「美香を、抱きたい」
今の今まで、「美香さん」と読んでいたが、それが、「美香」に変わっていたのだ。
その呼び名に、美香は親しみを覚えた。こんな方なら抱かれてもいいと思った。
夫は月一度くらいは、美香の躯を求めて来る。が、それはキスやフォアプレイもなく、いきなり挿入し、二分もせず、夫が果ててしまう。
女盛りの美香なのだ。そんな夫に対して、躯が疼くこともある。そんな毎日を送っていたので、中条の言葉は甘言と感じつつ、躯が火照って来ていた。
わいわい横丁のすぐ近くにラブホテルが数店建っている。
美香は、そこに誘われると思い、不安だった。
「うちのマンションに、ちょっとお越しになりません？」
「ええっ、そちらのマンションに？　奥様がおられるのでは？」
「いいえ、私はシングルですよ」
意外だった。この歳の男がシングルなんて。
タクシーで十分でマンションに到着。部屋は、十一回の最上階。２ＤＫ。南、東、北に窓があり、東の窓から、小さく東京タワーが光っていた。ＤＫは、八畳くらい、それに六畳二間、一間は書斎、もう一間はベッドルーム。
まず、書斎に招かれ、キルシュワッサーが出された。
それは、アルコール度四十二％。リキュールとしては、強い酒である。口に含むと、ほのかにチェリーの香りが漂うが、辛口なのだ。
美香は勧められるままに、一口含んでみた。唇が熱くなって、舌に痺れを感じた。
中条は、語り始めた。
「私がこのリキュールに関心を持ったのは、『あの胸にもう一度』を観てからなんです。アラン・ドロンが待つホテルに向かって、黒革のジャンプスーツを纏ったマリアンヌ・フェイスフルが、大型バイクで快走。田舎らしいホテルにベッドイン前に、キルシュワッサーをショットグラスで二人してグィと飲む。そして、フェイスフルをベッドに誘い、胸のジッパーを開いていく。その音がジジジッと聞こえ、バストが徐々に現れてくる。このシーンこそ、フランス流のエロチシズムだと思いましたよ」
美香は、髭で覆われた口元を見詰めていた。そのとき、あの部分が濡れているのに気づく。
中条は、美香の背後に回り、項に舌を這わせていった。美香は、耐えられなくなり、顔を仰け反らせ、中条の唇を受け入れた。
「抱いて欲しいの」と、美香は大胆に言った。中条はそれに応じて美香をベッドに誘った。
仰向けになった美香に、中条の手が伸びて来て着物の裾を開く。

透き通るような白い大腿部が、徐々に露になる。
和服では、いつもパンティを履かない美香である。
ディープキス。柔らかく、柔らかく、強く。ウウッと喘ぐ美香の声。
帯締め、帯、着物、長襦袢をゆっくり剥いでいく。
そんなことは、中条は手馴れていた。
そして、中条は素早く 着ているものを脱いで、ブリーフ一枚になり、美香の躯に圧し掛かっていった。
中条の唇は、頬、項、耳朶、乳房、乳首を這って、腹部から股間、大腿から、足の指先まで、舐めまわす。
美香は耐えられなくなって、中条の躯にしがみ付き、股間を開いた。
中条の逞しいペニスが、濡れた美香の中に挿入された。
そして、ゆっくりと浅く、深く、ピストンを繰り返す。
美香は、瞼を閉じ、それを受け入れ、躯が火照り、汗が滴る。
四十分も経っただろうか、美香は脚を閉じ、
「このままにして……」と哀願するように呟いた。
「どうしました、美香」
「私、不感症かしら」と、意外な事を言う。
「じゃないですよ、こんなに濡れているのですから」
「でも、何か変なの。私って、エクスタシーを味わったことがないのよ」
理解に苦しむ、中条。

美香の躯を外し、仰向けに並んでタバコを吸っている。
そして 美香は語り始めた。
自分が、歩んで来た道を。

二、ＳＫＤ（松竹歌劇団）

紀ノ川の下流の近く、田圃と工場が点在する田舎で、美香は生まれた。
日本は、朝鮮戦争のお陰で、経済復興をなし、繊維産業も盛んになる。テレビが普及しだし、「君の名は」が人気番組となっていた。
昭和三十年、九月八日、美香の誕生日。
相沢家は、祖先は、徳川吉宗に仕える下級武士。国内では戦争が終結していて、武士の

仕事としては、それほどすることもなかった。
吉宗の命で、農業を営む。
美香の祖祖父は、順調に農地を拡大。祖父がそれを受け継いで大地主となる。美香の父、順平はその土地を相続、村長となる。
しかし、終戦後の農地解放によって、大部分の田畑を、村民に安価で売り払った。
農業に見切りをつけた順平は、今後は、工業立国だと考え、繊維産業だと考え、繊維産業の一環である、なせん工場を起こした。工場は繊維産業隆盛期に乗って、拡大を続け五十人もの、従業員を使っていた。
妻、美津は、和歌山城近くの裕福な家庭に生まれ、少女の頃から日本舞踊とピアノを習っていた。
美香は、その一人娘として生まれ、三歳の頃から、母から日本舞踊を教えられた。
遺伝と言うか天分というか、たちまちの内に日本舞踊を習熟。小学生になっていた美香は和歌山県日本舞踊大会、未成年の部で優勝を果たす。
その頃、順平は取引先を拡大しようと、東京まで、足を伸ばしていた。いつも二泊し一日は仕事をし、もう一日は東京見物。
浅草には、何度も行っていたが、その日は、浅草花やしきに行って、ふと見ると松竹歌劇団の公園館が目についた。時間があったので、入場。
華やかな舞台上、日本舞踊、ラインダンス、タップダンス等が行なわれた、
それに目を奪われて、東京ではこんな芸能が賑わっているということを知った。
そして、いつかは娘もいつかは東京に出して、本格的な芸能を身に付けさせようと考えた。

和歌山城は、桜の名所として、県民に親しまれている。

城は小高い丘の上にあって、三辺を堀で囲まれている。その堀端には、二百本もの桜の樹が植えられ、三月下旬には満開。
美香、小学一年生。
父と母に連れられて、天守閣に登った。
眼下には、満開の桜。遠望すると、紀ノ川の流れが、春の日を浴びて、輝いていた。
父は、美香の顔を摩りながら、
「美香、よく見て置かんとあかんよ。紀ノ川は、和歌山一やけど、日本一では、ないよ。お前は何か一つで身を立てて、日本一になって欲しいいんや」
そう言われた美香は、
「はい、そうします」と言ってしまった。

和歌山城は、天正十三年、豊臣秀吉が藤堂高虎に命じて築城、そこで育った徳川吉宗が将軍となっている。それは日本一の座である。

美香は吉宗という名を聞いたことがあるが、将軍とは何かとは知らない。だが、日本一とは、途轍もないことだけは、解っている。

では、どうすればそうなれるか、父に聞いてみた。

美香には、千春という叔母が付いていて、西崎流の師匠である。千春は、十九歳で師匠となったが、ある日、父親の願いでお見合いして、一目惚れとなり、翌春結婚して家庭に入る。三人の子供を設け一時は育児に専心していたが、下の子が三歳になった頃から、数人の弟子を取っている。

日本舞踊は、神楽や伝承的民族芸能、盆踊り、民謡という、民族的なものではなく、あくまでも舞台上で上演することを目的とした、一個の舞台芸術である。

古代から、現在に至る、日本芸能の集大成と言える。

四百年近い歴史を経て、現在では歌舞伎を母体とする、いわゆる歌舞伎舞踊、座敷舞の伝統を持つ上方舞や京舞、新しい創造を目指す創作舞踊など、さまざまな顔を持っている。

千春は、歌舞伎舞踊の伝統を受け継いだ日本舞踊を習っている。

両親に優しく育てられた美香にとって、千春の仕込みは厳しい試練であった。

学校に行く前、千春の家に呼び寄せ、便所から台所、居間を磨かせる。帰校すると、稽古場となっている、十二条間に正座させ、三十分正座させ、心を鎮めさせ、それから二時間稽古に入る。

稽古は着物の着付けから、始まる。着付けは母、夏江から教えられていたのでそれほどの苦労はなかった。しかし、厳しい稽古には耐えられなかった。

泣いて帰って美津に、

「お母さん、私、苦しいんよ。なんで日本舞踊なんて習わんといかんの」

「美香も知っているや、お前は舞踊で日本一になるんやと言うたやないか。もっと頑張りなさいや」と、取り付く島もない答えであった。

美香は、生来負けず嫌い。父も毎日仕事で頑張っている。

母は、従業員二十余名の、朝、昼、晩の食事作り、寮の掃除、洗濯と一日中働きづめだった、

従業員の半数は、集団就職の人たちだった。九州、四国、遠くは日本海側から、中学を卒業した若者たち、と言うより子供のようであった。故郷が懐かしくなると電話して、泣いている子もある。

その少年、少女にとって、夏江の存在は母代わりだった。泣き言、いざこざ、恋、お金の問題も、中に入って割った。

普通は美香に優しい母だが、芸事には、容赦しない。

ある日、美香を呼んでこう告げた。
「美香、あんたは日本舞踊で身を立てるんよ。一生だよ」
一生と言われても、美香にはどんな人生なのか、想像もつかなかった。

満開だった桜の花が、春の雨で散っていった。
美香、中学一年生。
順平が、松竹音楽舞踊学校の入学案内パンフレットを取り寄せる。
中学を卒業すると、松竹歌劇団に入ることができる。そこで、優秀ならば、スターへの道が開ける。
父の工場はその頃、かなりの利益を上げていたので、美香に舞踊学校に入学するよう勧めた。
美香は、中学を卒業し、高校で勉強したいと考えていた。が、伯母がある日、SKD の中堅スターを連れてきた。美香がその人に会ったとき、その人は、
「伯母さんに聞いていますが、あなたなら歌劇団でも立派に踊れるでしょう。中学を卒業したら、すぐ入学してもいいんじゃありませんか」
美香は迷い、躊躇した。そして、母に相談する。
「美香、お母さんはね、チャンスだと思うんや。あなたは頑張りやなので、きっと成功すると思うんや」
母の眼は、しっかりと美香を見詰めていた。

松竹音楽舞踊学校の二年間は、瞬く間に過ぎていった。
芸名、城遥　じょうはるか
仲間からは、「美香ちゃん」と呼ばれていた。
「美香ちゃん、パンダを見に行こう」
美香の友人、佳代から上野動物園に誘われた。
昭和四十七年十一月四日、中国から贈られたパンだの歓迎式が行われていた。
前月には、上野駅前に京成百貨店がオープン。上野界隈は賑わっている上、動物園は、パンダまでも来ていたので、駅から、動物園へと続く道は、人垣に埋もれていた。園内に入ったが、パンダの檻の前には大行列が出来ている。
美香は小柄で、身長も低く、遠くから見ようとしても、何も見えなかった。
「佳代ちゃん、おんぶしてくれませんか」
「ああ、いいよ」
美香はベンチの上に乗ってから、佳代におんぶして貰った。
その日、美香はジーンズを履いていた。

佳代は行列を掻き分けて百メートルほど前進、パンダの頭だけが少し見え、
「佳代ちゃん、目の回りの毛が白い熊だよ」と、頭上から説明していた。
五分程して、元の行列に戻ろうとしていた時、美香は股間が濡れているのを感じた。それは、これまで味わえなかった快感だった。そして、佳代に訊いてみた。
「美香ちゃん、あなたセックスの経験がないんでしょう。あそこが濡れるということは、性的感情が昂まったからよ。それはセックスした事と同じようなものよ」
美香は、裕福な家庭に育ち、両親の優しさに囲まれ、これまで成長して来たがセックスは何かとは知る由もなかった。一度その味を憶えるとまた経験したい欲望が起きるもの。
団員たちは、二人部屋に入っている。美香の同室者は、カオル。
入団してから、一ヶ月後だった。カオルが語り始めた。
「美香ちゃん、レズってしってる」聴いたことがある事がであったがそれがなんだか全く解らない美香だった。
「じゃ、説明してあげよう、セックスは男と女がすることですが、女対女が愛し合うことをレズと言います。肉体的にね。解りますか。ちょっと試して見ましょう」
カオルは美香の乳房に触れ、左手で美香の乳首を揉んだ。美香は躯が熱くなるのを感じた。そして、右手は腹部を這い、さらに股間へとすすむ。同時に唇を合せた。
美香の股間から、熱い液体が滴り出していた。その液体を口で吸うカオル。
美香が居たたまれなくなり、腰を振る。カオルの舌が陰部内を襲う。

その外側を舐め回し、更に奥へと進む。そのとき、美香は喘ぎ出していた。
「美香ちゃん、気持ちいい？」
「ええ、今まで知らなかった感じ」
美香は信じられなかった。なぜ、このような快感を得たことを。
ことが終わったとき、カオルは美香の耳元で囁いた。
「美香ちゃん、今度は自分でやってごらんなさい」
その夜、美香は眠れなかった。股間が熱く疼いているようだ。
そっと、手を当てて見ると、陰部が濡れていた。中指を陰部に宛がって、擦って見ると、もっともっと気持ちよくなりたいと感じ、中指を奥の方へ導いいった。中はなんだかの液体で満ち溢れていた。更に、中指で陰部の上を擦ってみると液体が中指に絡みついてくる。一番奥まで中指を入れようとしたが、深くて届かなかった。奥には丸い突起がある事がわかる。
躯が震えだし、頭の中が空白になったようだ。
やっと、美香は理解することが出来た。これがカオルのいうエクスタシーということであろうと。

昭和五十年、城遙は、ファイブフェザーズの一員となる。
日本は、高度成長期の真っ只中にあり、サラリーマンの給料は年々十パーセント近くも上昇していた。美香の収入は、それらの五倍位も得ている。
日本の大都市には、幾度も公演旅行を果たしている。大阪、広島、福岡等々は二度、三度も公演している。
美香には、百人以上の熱烈なファンが付いていて、今で言う「追っかけ族」が公演旅行に付いて来ていた。

その一人が、荻俊太。十七歳。美香、二十歳。
美香はその頃、「華麗なる生活」というべき、日々を送っていた。高収入なので、自分の好きなものは何でも買えた。
仲間に注目されたのは、ウエアである。
田舎での美香だったが、色彩感覚は抜群。それは、母、美津が着物姿では、周りの人々から注目されていたし、父の経営するなせん工場にもよく行っていて、色に対する関心が深かったのであろうか。
美香が着るものは、突飛な色、柄が多い。先輩たちはいつもチェックしていた。
ある日、その先輩たちに呼ばれ、「美香ちゃん、あんた行き過ぎじゃないの。そんな派手な格好をして。でも、そんな発想はどこから来ているのかしら」
「……」
美香は答えることが出来ない。
やがて、美香への、嫌がらせが始まった。
ファイブフェザーズ出番五分前、衣装棚を見ると、美香の舞台衣装が消えていた。ファイブフェザーズの一番の仲良し、由紀に訊くと多分
先輩のいたずらであって、その先輩に謝ればすぐ衣装を出してくれるだろうという。
「先輩、お願いです。どうか私に衣装をすぐ出してください」と頭を下げた。
美香は生来勝気な性格なので、他人に謝ったり、ましてや頭を下げたこともなかった。その場は何とか切り抜けようと思って、思わず頭を下げてしまったのである。
美香は決断した。この苛めは、自分がトップクラスになるまで続くだろう。それまでは耐え続けるのだ。
少しでも暇があると、美香は映画を観に行った。浅草界隈は映画館が数館合って、その一館で恋愛の名作「慕情」を観た。香港の夜景を背景とした、ラブシーンに魅入られた。そのキスシーンが、甘美に感じられた。
以前、レズの相手のカオルと唇を合わせたことがあったが、自分ではキスをしているとは思わなかった。

その頃、先輩に男役の玲が、美香の心を惹いていた。美香の顔、躯は女向きで、男役は

回ってこない。そんな美香に、玲も興味を持っていただろうか、ある日、楽屋裏に誘われた。
玲は、こう切り出した。
「美香ちゃん、あなたの女っぷりは、私の心を揺さぶりますよ。私は自分でも男だと思っているので、あなたに恋心を抱きました」と言って顔を寄せ、唇を合わせた。美香も玲に憧れていたので、その唇を強く吸った。美香の真実のキスだった。甘く、切ない思いがした。

公演旅行での、最大のイベントは福岡の「夏祭り」。
毎年、福岡公園の大公演場で行われ、ファイブフェザーズも参加する。
その折、俊太も追っかけ組の一人として、参加して夏の踊りを見ていた。
舞台が終わると、俊太はバラの花束を抱えて、楽屋までも来て、美香にはにかみながら、その花束を渡し、握手まで迫った。その様子を近くで玲が見ていたのか、
「美香ちゃん、あの方は、あなたのボーイフレンドじゃないですか。じゃ、私をどう思っているんですか」
「……」
「止めてください。あなたには、私がいるんだから」
美香にはボーイフレンドなどいない。ただ、俊太はなぜかいつも地方公演に付いてきて、花束を持ってくる。多分美香に気があるのだろうと考えていたが、ボーイフレンドとは思ったことはない。
「玲さん、ごめんなさい。あの方はよく楽屋に来ていますが、私の特別は方ではありません」と、きっぱりと言い切った。
玲も「ごめんね、美香ちゃん、私の勘違いでしょう。これからも仲よくしましょうね」
その場はそれで終わったが、美香は俊太のことが、なぜか心に残っていた。

昭和五十四年、美香二十四歳。
日本は、昭和四十六年、ニクソン・ショック。アメリカ大統領、ニクソンが突然発表した，金と米ドルの交換停止などを含むドル防衛策および政策変更が国際社会に大いなるショックを与えた。続いて、昭和四十八年、オイルショック。
当時、アメリカ経済、財政状況は、ヴェトナム戦争により、悪化。双子の赤字、ドルの垂れ流しを生んで行った。
戦争が終結し、経済、財政を立て直すことを目指し固定相場制を採用アメリカ再建優先策をとったが、その結果、米ドルは下落。
原油価格が米ドル建てであった。そのため、ＯＰＥＣは、第四次中東戦争勃発を機に対

イスラエル制裁措置として、原油価格を大幅に引き上げた。
日本経済は、この二つのショック効果をまともに受け、「戦後最大の不況」に突入。
昭和四十年には、戦後初のマイナス成長を記録。日本は、このショックを乗り切るため、対外輸出競争力を強化することに邁進した。
国際社会の対日批判を強め、国民生活の充実に眼を向けさせる原因となった。
そんな社会変動にも、耐えてＳＫＤは健在だった。
美香のファンは全国に広がっていった。そのうち、ある特別な人物がいた。
文部省の外郭団体、財産法人日本スポーツ振興会、専務理事、沖田岩男。
沖田は、浅草国際劇場の前列に座っている場合が多い。装いは英国紳士風で、ヘリンボーンのジャケットに、ウールのハットを着け
ている。歳は、五十歳くらい。観劇時ハットを脱いでいて、髪は日本男児を誇るように、短くカットされている。
美香が舞台に上がって来ると、激励の拍手を送り、演技が終わると「ブラボー」と大声を挙げていた。
ある日、秘書と名乗る男が現れ、専務が食事にお誘いしたいと言ってきた。
美香はすぐ気づいた。アツ、あの人かと。
美香の視力は余り良くなく、遠くの観客はぼんやりとしか見えない。最前列なら、明確に見えるので、その人物はよく知っている。あの拍手を送ってくれるので、好感を持っていた。で、その話に応じようと思った。
どこに誘ってくれるのか、その人物なら、高級料亭とか、高名なフレンチレストランだろうと思っていたが、その場所がなんと台湾料理店だった。
東京、渋谷道玄坂から、一歩入った裏どうりにある「麗郷」。
この店は、どんな人物であろうと予約が効かない午後八時に行くと、店外には十人ばかりの行列が出来ていた。三十分も待たされて丸テーブルの八人席を宛がわれた。四人のグループとカップルが一組。専務はそんな席でも慣れているのか、悠然と構え、次々とオーダーした。ビール、腸詰、シジミ煮、焼きビーフン、豚足など。
「腸詰って、あれですか」と美香が指差したのは、カウンター席にぶら下がっている三十束野ソーセージのような物だった。
「ええ、あれがこの店の名物だよ。微妙な調理方法で、調理場の油と湿気があれを成熟させるんだ。さ、これを美香、一口で食べてごらんなさい」
その皿には、一本を数枚に刻んだ腸詰に、香菜が添えられ、特別の辛味噌を付けるようになっていた。
美香がその一片を口に含むとジューシイな香りと、辛さが相まってどこにもない味だった。
「先生」、美香は専務をそう呼ぶ。「驚きましたね、こんな所に連れてきて、戴くなんて。先生クラスの人なら、

もっと高級な店と思っていましたが」
「いや、私はもうそんな店は飽きていますと。この店は大衆的な店だが味はどこにも引けを取りませんよ。城さんを、ぜひこの店に誘ってみたいと思っていたのだ」
「ありがとうございます。でも、なぜ私一人が？」
「あなたのジャズダンスは、私がブロードウエイで観たそれよりも魅力的でした。体の動きが、リズムにぴったりとしていて、日本人とは思えないほど、見事でした」
その頃、ファイブフェザースは、ジャズダンスを得意としていて、人気も更に上昇。
「先生、これからも私の舞台を観に来てくださいね」
「勿論だよ。来月、ハワイに行きませんか」
突然、そう言われた美香は、戸惑いを隠すなかった。男性と二人で旅行するなんて。

玲に相談すると、これからも先生にバックアップして貰うなら、一緒に言ってもいいのではないですか。しかし、男と女の関係はよしなさいと釘を刺された。
美香は、先生を男性として意識はしていない、ただ、有力な一ファンとして考えていた。玲にそう言われて見ると、先生は美香を女として、考えているかも知れない。
ＪＡＬ、ファーストクラス、沖田はシャンパンに酔ったのか、盛んにしゃべっている。
「城さんは、ボーイフレンドがいますか。初恋はいつですか。年配の男と付あったことがありますか。私はね、若い女性と何人も付き合いましたが、城さんの遥は女性は初めてなんだ」
「といいますと」
「あなたは目立つ存在ですよ。舞台では華麗に演技し、普段でも華やかな、衣装を着けている。しかも、私に優しいようだ」
「そう言われますと、赤面もんですが」
沖田の話は、美香が眠りに入るまで続いた。

午前十時、ホノルル空港着。タクシーに乗る。当然ホテルに行くと思って美香だが、カイウラニどうりのコンドミニアムだった。部屋は五階のオーシャンビューで，スリーベッドルーム。リビングとマスターベッドルームは海に面し、八月の潮風が爽やかだった。ランチはインターナショナル・マーケットプレイスでピザを食べたが、夜食は美香が作ることとなった。
沖田は、静岡県清水市で育ったので、マグロについては煩い。
一人でタクシーに乗って、漁港に行った美香は、トロではなく、赤みを選んだ。そして、母がしていたように、ヅケにして、大皿に並べた。まずビールを一口飲んだ沖田は、赤み

を頬張った。
「こいつはいける。私が贔屓している「弁天山美家古寿司総本店」のヅケと較べても引けを取らんど」と、満足げだった。
食事が終わると、沖田はブランディを飲み、パイプを燻らせている。
先にバスに入り、美香は自分で持ってきた純白のバスローブを着けている。リビングのチェアは低く、巨大なもので、そこに座った美香の内股がはだけていた。沖田は横目でチラチラ眺めていたが、素知らぬ振りをしている。
「先生、私って、可愛いでしょう。」と、美香は挑発するように言った。
沖田はそっと手を伸ばし、内股を撫ぜた。
美香はこれからどうなるのか解らなかった。だが、沖田はそれ以上のことはしなかった。
美香の額に軽くキスして、
「おやすみなさい」と、自分のベッドルームへ行ってしまった。
沖田は、美香より二十歳以上も年上だが、男と女が旅行すれば、セックスするのが当然だと思っていた。それもなく、眠りについたので、この方は何を考えているのか、理解し難かった。
深夜、一人で起き、ビーチを散歩していると、若いカップルがむずましそうに歩いていた。その時、あのカオルとのことを想い出していた。
彼女は、美香の内股を舐め、進んでヴァギナにも舌を入れてきた。その感触がまだまだと蘇り、自分の指を入れてみると濡れていた。
コンドミニアムに戻って、ブランディを口にし、ベッドに横たわったが眠れなかった。
朝方、夢を見た。
美香のヴァギナに、貝殻から抜け出したマテガイが、硬く大きくなって、這い回り、自分が喘いでいた。夢から覚めると、汗がシーツまで通っていた。

沖田は、早く起きて、散歩に出たらしい。
朝食は、ホテル、ハワイアナで摂った。サニーサイドアップにナイフを入れながら、沖田は、
「城さん、あなたは着物がお似合いだと思うよ。そんなに首が長いし、上半身がスリムだ。私が買ってあげよう、どんな着物がいいのだ。東京に帰ってから、三越でオーダーしなさい」
「ありがとうございます。でも、着物は高価なものですから」
「大丈夫だよ。私は交際費が自由に使えるから」
そう聞いた美香は、役人上がりの専務の豪奢は生活ぶりを知った。また、その逆に沖田は税金泥棒ではないかと思った。
しかし、美香は沖田のそんな振る舞いにも拘わらず好感を持っていた。

帰国して、三越に行く。
呉服売り場には、高価な友禅や絽の着物がお金持ちを待つように並んでいた。
美香が選んだのは、色彩が微妙な久米島紬。
売り場主任に訊くと、それはこれから秋に向かって着るもので、灰色に染めた赤みのある茶色地で、冴えた水色の格子を織り出した一品だった。米島紬は、泥染め、グール（さるとりいばら）で何十回も染め、さらにティカチで同じくらい染めた上、泥を掛けて乾かす。洗う。人によっては何百回も。
それだけの手間を掛けて出来上がった布地は手で触っても温もりが感じられた。そして、帯も同色のものを選んだ。

台風一過。
熱海湾からの、乾いた風が、緑の芝生を越え、ホテルの窓に吹き込んでいる。
美香と沖田は、熱海富士屋ホテルに泊まっていた。
美香が着けているのは、出来上がったばかりの久留米紬。
「美香ちゃん」。ハワイ帰りのフライトから、沖田はそう呼んでいる。
「庭に出て、写真を撮ろうよ。あなたの着物姿を、フィルムに納めて置きたいいんだ」
庭は、芝生一面が生みに向かって下っていて、その下の方に立つと望遠レンズでは、青い海だけがバックとなる。太陽が西に沈んでいく。
美香の顔半面が西日を受けて輝き、逆の半面には深い影が出来ていた。着物は西日に照らされ、茜色に鈍く光っている。沖田のニコンＦＭモータードライブは、三十六枚を十秒程で、撮り終わってしまった。
「私は、ポートレートには自信があるんだ。出来上がると、私のデスクに飾って置くよ」
「先生、そんなことをしてもいいのですか。部下に知られますよ」
「構いませんよ。私の自慢の女性ですから」
沖田にそうれると、美香も女として、自信がついわいてきた。
ホテルで一泊したが、また何も起こらなかった。そしてまた、これで着物を買いなさいといって、小切手を切ってくれた。それは、個人名だった。
沖田は役人根性の一面もあるが、自腹を切って、美香にプレゼントしてくれる人であると、美香はその良心を感じた。
久米島紬が沖田に褒められた美香は、その言葉に甘え、そしてまた、これで新しい着物を作ってみようと思った。三越で選んだのは、鳶八丈。秋には茶系の着物を着けてみたくなる。美香はその頃ファンに誘われて、お出かけの機会が多かった。蓬、夜叉五倍子、刈安で染めた糸が奥行きを感じさせ、小豆茶の織り名古屋帯と合わせると、暖かな印象を与えるような着物が置かれていた。布地は、白地に銀ねずの緯糸を織り込んだ様色を主に織り出した、きりりとした、爽やかな季節を連想されるものであった。

十一月三日、体育の日。
新潟で陸上競技大会が開催され、沖田はその総括責任者であった。美香もゲストとして、招待された。そして鳶八条を着ていった。
宮城陸上競技場は、観客に埋め尽くされていた。美香は貴賓席に座っていた。そこには、宮城県知事、仙台市長、助役、宮城陸連会長
などが同席。女性は県知事の秘書官一人で、場違いと感じるくらい、着飾っていた。年齢は美香と同年輩のよう。同席の人たちは、秘書官と賑やかに会話していた。
沖田は、大会運営者連と打ち合わせがあって、その席を外した。
美香の前に座っていた県知事は、ふと振り返って、美香を見た。その着物姿を見て、
「凝ったお着物ですね。それはあなたが選んだのですか。私は鳶八条を終わり着た女性を見たことがありません。大会が終わったら、お食事でもいかがですか」と誘われた。
そのことを沖田に告げると、
「よろしいでしょう。私も同席しますから」
招待されたところは、茶寮宗園。部屋から望む日本庭園には、モミジが黄葉真っ盛りで、それを眺めながら、豪勢な食事が始まった。
「城さんのお召し物は、ご自分で選んだとおっしゃていましたが、ここらでは見られない和服ですね。また着こなしが粋ですね」
知事に誉められた美香は、
「それほどでは、ございませんが、私は舞台で着物よく着けているのです」
「舞台？」
側から、沖田が口を出した、
「ご存知ではありませんでしたか、かの女はＳＫＤのスターですよ」
「あ、そうでしたか。私も浅草国際劇場に何度も行ったことがあります。どこかで見た顔だと思っていましたよ」
「ありがとうございます。これからもご贔屓に」
「来年、仙台祭りにいらっしゃいませんか。と言っても、私はもう知事ではないかもしれませんが」
「大丈夫ですよ、あなたの実績なら、当選確実でしょう。私も応援しますから」
と沖田。
美香は男の友情を思った。女の薗にも、友情はあるが、裏切りもある。その闘争に打ち勝たなければならないと、美香は確信した。

浅草界隈は、変貌しつつあった。

昭和五十三年七月二十日、十七年振りに隅田川花火大会が復活。
十月から一ヶ月間浅草観音の示現、千三百五十年記念開帳にあわせ、浅草観光連盟が、浅草祭りを開催。境内の「昔の奥山風景」を再現。
十一月一日、浅草の会では、浅草公会堂で、二百回記念祭りを開催。
「浅草双紙」を記念出版。久米平門堂も再建される。
それらに合わせて十月十五日から一ヶ月間。二階バスが上野、浅草を運行。日本各地から、観光客を集めていた。

その頃、美香は、中堅スターとしての地位を固めていた。
どちらかと言うと姉御肌で、後輩達の面倒をよくみていたので、信頼されていた。また、トップクラスの人たちにも可愛いがられていたが、同じクラスの人たちからは、苛められることが多かった。男役トップは錦縫。ある日、彼女に呼ばれ、
「あなたは、小柄で細い体ですが、激しい踊りが上手のようですね。ちょっと色気がないようですが、指先だけが色っぽいですね。私の
はこんなに大きくて、男みたいでしょう。だから美香ちゃん、好きなの。いつでも遊びにおいで」
意外な事を聞いた美香は、そのことを玲に話した。玲は友達の何人かに、その何人かに話したのだろうか、その仲間から、嫌がらせが
続いた。それとなく、悪口を言われたり、休日に眉毛をそり落とされたこともある。また、ある日、舞台が終わった時、錦が楽屋に来て、「お疲れ様」と、美香の背を揉んだことがあった。それを見ていた先輩から、「美香、そんなことをするのは、十年早いぞ」と脅かされたこともある。
更に、沖田のことも問題にされた。
「美香ちゃん、あんたの付き合っている沖田さんとはどういう関係なの？」
美香は涙を出さなかった。これからの厳しい生活が待っていたからでもある。

父、順平の体調が思わしくなく、癌の疑いもあった。一人娘の美香は父、母の面倒を看なければならない。お金を稼ぐにはどうするか、
父の工場をどうするか、結婚をどうするか、頭を悩ませる要因はいくつも存在していた。

意外だった。
俊太が結婚を申しこんだのだ。

「茨城で、一緒に寿司屋をやろう」
それが、プロポーズの言葉だった。
「私は、お姉さんのようになるのですが」と、心配を隠せなかったが、俊太の眼が輝いていて、この男ならと思った。
そのとき、美香には解らなかったが、厳しい結婚生活が、十六年も続くことになる。
そして、息子、俊一郎は二年後の生まれた。

三、寿司屋

「納豆巻き。手巻きで」
常連客の一人から、俊太に声が懸かった。俊太は嫌な顔をしている。
カウンター席、十四席、テーブル席、十四席、座敷、十八席、田舎の寿司屋としては、中規模の寿司屋である。
カウンター右側には、俊太、左側には、美加が立ち、俊太は白い割烹着に手拭いで鉢巻をしている。美香は着物に割烹着を着けている。
俊太は、茨城生まれであるが、納豆の臭いが耐えられない。
「美加、頼むよ」と、いつも言う。
美香は関西育ちだが、東京でもう二十年近くもすんでいたので、納豆は好みの一品である。手巻きといってもスーパーで売っているおにぎり位の大きさ。田舎では、体を使って働く人が多いので、にぎり寿司も特大サイズを出している。採算的には、それほど儲からないが、その頃は客で賑わっていたので、店としては繁盛していた。
開業は、俊太の父、徹。俊太が店に出るようになったのは、昭和五十五年。美香三十三歳で美香あった。
夫婦が営業しだして二年くらい後、仕出しまで行うようになる。農業組合の宴会、お葬式、お誕生日、消防団の寄り合い等々、注文はひっきりなしの状態であった。
稲荷寿司を二千個作ったことがある。夕方五時に配達する予定であった。それには、早朝四時に起きて、前日に仕入れた厚揚げを煮なければならない。二千個分だと、大鍋で煮るが、その場に立って大杓子で掻き混ぜる必要があった。それには三時間もかかってしまう。その作業は美香の仕事だった。煮上がると、一枚ずつ裏返す。二人で塾しても、四時間。別の鍋ではご飯を炊いている。野菜を煮ている。出来上がるとそれらを混ぜ合わせる。最も時間がかかるのは、厚揚げに混ぜご飯を入れること。その作業は俊太の方が早い。美香は几帳面に作業をするので、なかなか捗らない。そんなとき、俊太の声が飛ぶ。

「美香、そんなに丁寧にすることはないぞ。適当にやれ」と言うが、美香は手抜きを許さない。
昼食は、厨房で立ったまま、稲荷寿司を二、三個食べる。
稲荷寿司が出来上がるのは、もう五時頃になっている。配達役は、美香。軽でお客さんの所に運ぶが、そのクルマは、中古車なので、よく故障を起こす。美香は、もうこの地では、良く知られた顔なので、謝れば許して貰える。店に帰ると、俊太がカウンターに立って寿司を握っている。
そんな生活が十四年も続いた。
俊太の父、徹が引退。平成八年、夫婦が店の跡を継いだ。
俊一郎は十歳になっていた。俊太と、俊太の母、美津は、俊一郎を猫のように可愛がり、何でも好きなものを与えていた。
美香は、仕事に追われ、俊一郎と過ごす時間がほとんどない。
俊一郎にとって、俊太と美津は、父と母同様であった。
ある日、俊一郎が店にきて、「大トロ十カン」と注文した。俊太は黙っていたが、美香は、「俊一郎、あなたは中学生だ。大トロ十カンは、いくらだと思っているんだ。自分で稼いで食べに来い」と睨み付けた。
「おばあさん、おじいさんなら、そんなこと言わないよ」
「何を言うんだ。あなたは私の子だ。親の言うことを、聴きなさい」と叱った。
俊一郎は、不満気な背を向けて店を出て行った。
学業成績は優秀である俊一郎だが、一人で部屋に閉じ篭もるのが好きなようで親密な友達は出来なかった。親に似たのか音楽が好きで、ジャズやフュージョンをＣＤで聴いていた。そのうち、誰に習った訳でもないが、ジャズの曲に合わせて踊っていた。それを見かけた美香はＳＫＤ時代のことを想いだして、
「お母さんが、ジャズダンスを教えてあげましょう」と言うと
「お願いします」と、正座して言った。
美香はなんとなく、この子は将来自分のようになるのだと、感じた。
ジャズダンスのレッスンが始まった。俊一郎は、十歳と言えども体はキビキビと動いた。多分、それは美香のＤＮＡであろう。
美香は三歳から、日本舞踊を踊っている。小柄な少女だったが、俊一郎は、父に似てか、その歳にしては背も高く、筋肉も程ほどに付いていた。
そのことを、祖母、美津に話したようだ。
ある日、美香は美津から命令された。
「美香さん、あんたは寿司屋の仕事に励んでください。俊一郎は私が面倒を視ますから、あなたは手を引いてなさい」
美香は思った。自分の腹を痛めた子であるが、それだけに可愛いい。
教育は自分でするのが当然だ。なのに手を引けなんて。

これは「恨み」という感情だろうか。義母に対して疎ましい心を抱くようになった。
俊太は、仕事が精一杯のようで、息子についてはそれ程関心を示さなかった。俊太も、父母にすべて構われて育ったはず。

二年後。
美香は店の人気者になっていて、常連客から酒を注がれることが多くなっていた。
ＳＫＤ時代、大酒を飲んでいた美香だったが、この店では仕事に支障があるだろうと、客から勧められても、酒を口にする事は殆どなかった。
しかしもう、客がそれを許さなくなっていた。そんなことから美香は日本酒について、習熟していった。
店には茨城の地酒、菊盛、久慈山が常時備えてあり、客の人気は菊盛の大吟醸だった。その酒は、鑑評会のために、特別に製造した大吟醸酒の瓶詰。華やかな香り、熟成がもたらしたふっくらとした甘みがあって木内酒造の最高級品。
美香は既に木内酒造を訪れ、杜氏に詳しく教えて貰っていた。
日本酒には、普通酒、本醸造酒、純米酒、吟醸酒の種類がある。吟醸と大吟醸の相違は、その精米歩合による。五十パーセント以下まで米を磨いた場合、「大」の字が付けられる。そして、「吟醸して、製造された清酒で、固有の香味を持ち、色合いが良好なもの」というだけの事のなっている。
大吟醸酒は、そのように製られるので、個性が強く、味も濃くなり勝ちなので、寿司を食べるには合う酒ではない。まったりとした味は、食後酒としては最適な酒である。
ある日、地元出身の国会議員が、秘書らしい美人を伴って来店。そして、いきなり、菊盛の大吟醸酒を注文。
「お客さま、普通酒になさいませんか」と、美香は丁重に言った。
「おい、女将、知ったかぶりをするな。大吟醸酒は、高いけど、旨いぞ。だから注文したのだ。それがなぜ、普通酒を勧めるのか」
「すみません。出すぎた口を利いたようですが寿司は淡白なもので、香りや味が濃い大吟醸酒は、寿司を摘むには合わないと思いまして」
「じゃあ、あんたのお勧めの酒は？」
棚から美香が取り出したのは、精撰「姫の井」。
それは、新潟の高柳町の小規模の醸造元、石塚酒造で製られたもので、甘みがあるが、サラリとした味の酒だった。一升瓶のデザインを見て、いかにも田舎くさいラベルが貼られている。
「おい、試してみろ」とその男は秘書に言った。
「少しフルーティな感じですが、これならお寿司にとても合うと思います」
「じゃ、俺は燗にしてくれ」

「すみません。新潟の酒は、冷やで戴いた方がいいのですが」
「そこまで言うなら、女将に任せる」
「ありがとうございます。では一献」と美香は勺をした。
店では、常連客であってもお酌をすることはない。ＳＫＤ時代は、そんなことをいつもしていた。その手付きを見ていた国会議員は、
「うん、酒も旨いが、あなたも美味しそうだね」
「冗談じゃありませんよ。私はこんな田舎の一人の妻なのよ」
「いや、その手付きは都会仕込みですいぇ。どこか料亭の女将でも」
美香は答えなかった。ＳＫＤのことは、脳裏から去っていた。
その国会議員は、仲間にこの店の様子を知らせたので、関東一円の政治関係者がお客になって、店は栄えていた。

平成八年、美香は四十歳を越えていた。
俊太の母は、三年前から、店に出ていない。何もすることがないので、孫、俊一郎の面倒を看るのが楽しみだった。
俊一郎は小学生となっていて、放課後や休日には、友達と遊ぶようになっていた。
義父、徹は、以前お客様連と、碁、将棋を打って遊んでいたが、義母美津は執拗に美香を苛め始めた。
五月の陽気が出始める頃、糠漬の仕方を教えると言って、夜遅く納屋に連れて行った。納屋は本家の側に建っているが、黴臭い臭いが
漂っている。大樽には既にナス、キュウリ、ニンジンなどが入っていた。底から掻き回せと言われた美香は、
「あ、この臭い嫌いです」と、思わず言ってしまった。
「美香さん、あんたはうちの嫁なんだよ。糠漬が臭いなんて、とんでもない。うちにはうちの漬け方があるのよ。臭いとかは問題じゃない。俊太と俊一郎には、美味しい糠漬を作ってやれ」
今、美香は美津の言うことは、命令として受け取っている。
臭いのを我慢して、セロリ、ミョウガなぞを漬けてみたが、美津はまずいと言って捨ててしまった。俊太は美津の味に慣れているので、
美香の漬けたものは食べなかった。
お盆には、この一家は大洗町サンビーチキャンプ場に行く事になっている。美香は、紀ノ川や、和歌浦海岸で、子供の頃泳いでいたので、水泳は達者。
俊一郎は、東京で生まれ、ここ、海から離れた所で育ったので、泳げない。その日は波は凪いでいた。美津は、「俊一郎、あそこまで
泳いで行きなさい」と言う。あそことは、百メートル先に岩場。俊一郎はそこまで泳げる

はずがない。美香は、
「義母さん、無理強いさせないでください」と、哀願したが、美津は許さなかった。
俊一郎はおずおずと海に入って行ったが、恐怖の余り、青い顔をして、震えながら、帰ってきた。美香は、俊一郎の濡れた体を拭っていると
「よしなさいよ。この子は、私の可愛い孫よ。早く泳げるようにしてやらないと」
「でも、あんなに怖がっていますわ。私が来年まで教えて置きますか」
「美香さん、あんたはお母さんでしょう。自分の子供の教育も出来ないようじゃ、母親失格ですよ」
失格と言われた美香は悔し涙を流していた。

この近辺では、ゴルフ場が、次次と開発されていた。
俊太は、スポーツが得意なので、ゴルフを始めようと思ったが、そんな時間があるはずがない。パチンコならいつでもで出来るので、いつの間にか、凝り出していた。
俊太は、ギャンブルでは太っ腹で、一日、三時間くらいで、三万、五万円勝ったり、負けたりしていた。そのうち、競馬にも凝りでした。すべて一点買いだった。ダービーでは、十万円で、百万円になったこともある。
だからといって、仕事を怠った訳ではない。
だが、バブル崩壊の影響が後を引いていた。客が徐々に減り始め、経営が窮地に立つ。
その頃、寿司屋の土地、建物は、美津の名義だった。
俊太は、ある提案をした。それを担保に店の改装資金を得ようとした。
その資金は、もっと店内を都会調のモダンタイプに変えようと考えたのだ。出入りの業者に見積もりを取ると、予想外の金額だった。
俊太は美香に相談したが、良いアイデアはなく、残念せざるを得なかった。
バブル崩壊後、四年経っていた。
店はますますじり貧になっていった。俊太は転業を考え始めていた。毎月、一度は東京に行って就職口を探していた。
「これからは住宅産業の時代だ。私はある会社の重役を知っていて、営業ならお金を稼げるかも知れない。私は寿司屋だったから、営業には自信があるよ」
「……」
「どうだ、この際店を畳んで東京に行ってみないか」
美香は来るべき時が来たと思った。
美香には東京には沢山の友人がいる。寿司屋を止めるのは悔しい思いもするが、現状を続けていても楽しい将来は来ないだろうと、以前から考えていたこともある。
二人の思惑が思わぬところで一致していたのだ。
数日後、俊太は自分一人で東京郊外の一戸建てを賃貸契約して来た。

その家が、多摩ニュータウンの外れにあった。

美香は、中条と既に七回逢っている。
一度目は、和服売り場で。二度目は、中条のマンションで。
中条は、建築家らしく几帳面な性格で、美香と逢った時は、その所、時間、何をして、どうなったかを、イギリス製の革表紙のノートに書いている。

窓際から、梅の香りが浸入している。
三度目。町外れの瀟洒なフレンチレストランで、ディナーを摂っている。

先に席に着いていた中条は、ボジョレーを飲んでいた。一口含んで、ふと見上げると、テンのファーを着た美香が立っている。
「早かったですね、中条さん」
「いや、それ程でも」
男女が食卓に着くときは、女性を優先する意味からも、窓際に座らせる。
中条がそちらにと言ったのは窓が見える方だ。開かれた窓からは、梅の香りが二人の官能を擽っている。
美香は、ファーを脱ぐ。そこには、中条は、変身した美香を見た。
半袖のワンピース、朱色と灰色の花が、白いシルク地に描かれている。着丈は、美香の踝まであって、ウエストより十センチばかり上に、同柄のベルトが蝶結びにされている。Vゾーンはミシンが入っていず、カットしたままのもの。
色白の美香の躯に、花が咲いているようだ。ウオッチも凝っている。ベルトは、芳醇な色合いの茜色のクロコダイル製。盤面は、シックな朱色、いずれも日本伝統の色であり、着物姿にも似合うものである。
ミスマッチも甚だしいが、中条はテニス帰りだろうか、黒の短パン、同じくポロシャツ、ジャケットを着けている。
驚いたことに、ガラス窓に映ったジャケットの背中を見ると、背中いっぱいにクマの顔が描かれている。
中条は、ユーモアのあるお洒落をする人のようだ。
海鮮パスタは美香が、イカのフリットとステーキは中条が注文。ワインを飲みながら、おしゃべりしていた。
美香がパスタを半分ほど食べた時、タバコを取り出し、いかにも美味しそうに吸っている。中条が、始めて見た美香である。
「タバコ、お好きですか」

「ええ、酒を飲むときだけはよく吸います。中条さんは？」
「仕事の時は、必ずといって」
その日、美香のバッグは、大型のグッチ。そこから取り出したのは、数冊のアルバム。
そこには、ＳＫＤ時代の華やかな姿があった。
美香は、ファイブ・フェザーズのメンバーの一人だった。
三番嫂、道成寺、石橋などの艶やかな踊り振りであった。それは、今から三十年前のこと。よく見ると、体形が現在より、ずっとふくよかで、若さが漲っているよう。眼の前にいる美香は、妖艶というより、凄絶と表現したほうがいいのだらう、年輪を重ねた、熟した女がいた。
帰り際、公園を歩いていて、中条は華奢な美香を抱きしめていた。

美香の夫、俊太は今やトップクラスの住宅会社の営業マン。
帰宅は深夜になることも多く、しかも何時に帰って来るのか解らない。美香は、夫が帰るまで食事をしないで待っているのが、日常だった。
その日は、十一時過ぎに帰宅。入浴し、食事を摂ってベッドに入る。清潔好きの美香は、毎日必ずキッチンを隅から隅まで洗い、浴室も
自分が入った後、浴槽、フロア、壁をすべて拭い去る。そして、漸く、ベッドに横たわる。
ベッドは、キングサイズ。その時は夫が眠っているが、美香は夫の手を握りながら入眠するのが、常ある。
その夜、美香は眠れなかった。躯が生殺しのような状態だった。傍で寝入っている夫にそれとなく体を触れ、求めようといたが、夫が眼を開けても素知らぬ振りをしていた。
躯が疼いていた美香は、股間に指を挿入、二十分以上擦り続け、その快感の深さに溺れていった。そして、自分は不感症ではないと認識した。

中条のノートには、Ｓという記号が帰されている。
S, shot, 打った。つまり、射精したという記号なのだ。
四月二十四日、春の生暖かい風が吹いていた。
その日、美香の勤務はその日、午後五時まで。約束していた中条のマンションを訪れる。
職場では着物一本槍だが、その日はミニスカートにタイツを着けていた。
テーブルには、シャンペンが冷やされていた。二人で乾杯。そして、堰を切ったように激しく抱き合った。二人はもう慣れていた。
蜜を貪る程、甘いキスを繰り返し、中条の手は美香の髪を撫ぜまわし、項を這ってバストに至る。さらに、腹部、バスト、股間へと下がり、蠢いていく。
美香は、善がりはじめた。自らの口を押さえ、喘ぎ声を隠そうとしていた。

中条は、美香の手を取り、それを自分の屹立した男根と誘った。
それを美香の口に含ませ、擦り続けた。中条の中指が、陰部を弄る。
淫らで清清しいラブジュースが、溢れ出していた。
「お願い、ベッドで続きを」か細く、哀しげな声。
燃え出していた。ブラウス、タイツを自分で剥ぎ取った美香はパンティだけとなっていた。シルクのレース付きのピンク。陰毛が薄く透けて見える。
乳首が隆起している。美香は、子供の頃からの奔放さを増していく。
眼は、溺れるように宙を見つめ、底なしの欲望を剥き出しにしている。
中条は、美香の全裸を見たのは初めてであった。ラブジュースが滴った部分に、早く挿入したい願望に駆られていたが、美香は、もっと永いフォアープレイを求めているようだ。
次に中条は、美香をうつ伏せにし、足の指、一本一本から舐め始め、脹脛、大腿、臀部へと移行。
美香は、ヒップを上げてそれに応えた。
一般的に女の「止めて」は、「続けて」と同義語である。
美香も同様「止めて」と淫靡な声を挙げていたが、熟した躯は、それを許さなかった。
美香には、ＳＫＤ時代に鍛えられた肉体を持っている。なので、いつまでもこの状態を維持できることが出来よう。
攻めた。中条の突出した男根のあの敏感なところを執拗に弄び、嬉々しているようだが、内心はそれを自分の熱くなった部分に挿入されるよう望んでいた。
中条のその男根は、抗うことが出来ない状況に来ていたが、ゆるりと入っていった。
「美香、どうしてほしいの」
「余り激しくいないで。永くこの淫靡な世界に浸りたいの」

中条は、インナウト、インナウトを繰り返す。といってもやたらそうする訳ではない。
「七浅一深」は古い言葉であるが、彼のテクニックはもっと多様のバリエーションを持つ。詳しくは言えないが、二十分もそうしていただろうか、美香の顔は、阿修羅の形相であった。
やがて疲れ果てたのか、横になり、中条の胸に顔を預けた。
酒を二人で飲みながら、タバコを吸い、一服すると、中条の指は美香のクリトリスに添えられていた。
再び、愛液が溢れ出している。
美香は、貪婪だった。さらに、快楽を求めようとしていた。
「上になっていい」と言いながらも既に美香の陰部は、中条の蘇ったディックに宛がわれていた。
美香の、鍛えた腰がゆっくりと、また、激しくグラインドする。年上の中条を蹂躙する

ように。
短かくも、永い時間であった。
わだかまっていた、蠢く闇が消えていった。
美香は、髪を振り乱し、成り振り構わず叫んだ。

「来た、来たんだ……これよ、これ……」
そのとき、中条も果てていた。

男は一旦射精すると、女の躯から逃れたくなるが、中条は、中指をクリトリスに宛がっていた。それは、女の頂点が穏やかに、永く続くので、男としてはその躯を抱き続けると、女は男の愛情を感じるからである。
美香は、眠っているのか、穏やかな吐息で、その顔を見詰めると「菩薩」のようだった。
美香は、もう時間感覚を失っている。どの位時間が経っただろうか、美香は目を覚まし、罪悪感にさいなまれていた。自分に対して、夫に対して。
それが表情に表れていたのか、目敏く見つけた中条は、
「あなたは、他の男性と付き合うことに対して、遠慮したり、罪悪感を持ったりすることはない。ご存知でしょうが、役者が異性と交際するのは芸の肥やしだといっている。他の男と付き合って、男が女に対して何を望んでいるかを、もっと知ることが出来るでしょう。その情報を夫に還元すれば、夫の方もあなたを見直すだろう。それによって新しい、深い人間関係が生じましょう。そこに、待ちにまった春が、訪れるでしょう」
美香は、頷いていたが、その事が明確に理解しているようには思えなかった。

続けて中条は、言った。
「中年は、恋愛の適齢期」（海老坂武著）から引用した言葉、
「恋愛は、恋愛であって、不倫もクソもない。不倫こそ、まっとうな恋愛である」と。

漸く、美香は自分の置かれた立場が解ったようだ。
中条は、ダメ押しの気持ちでこう付け加えた。
「毎日、同じ顔を突き合わせて、同じ釜の飯を食って、人前でオナラして、ウンコして、最初に失われるのが、性欲である」
そこまで聴いた美香は、突然、涙を流し始めた。
中条は、合点がいった。美香の今の心理状況はこうであろうと。

ダメージとして、

家族を裏切った意識。
妻としての非行を成した意識。
今後の不安感。
グッドイメージとして、
女としての新しい目覚め。
女としての欲望と期待。
新しい生き方への期待。
それらが、ない混ぜとなって、一挙に頭脳に去来し、処理出来なくなり自分の言葉で表現出来なくなってしまった状態となっていた。
人間、大人も子供も含めて、言葉で表現出来なくなると、「泣く」ととい う表現を用いる。
今の美香は、それに該当するだろう。
やがて、美香の表情は、明るくなっていた。現在にして、やっと開放された気持ちだったのであろう。
夫から、家族から。

美香は、ベランダから、春風を味わいながら、満月を眺めている。
着けているのは中条のパジャマ。それは、アメリカ製で、フランネルで製られたワンピース型。男物のSサイズ。美香の身長には、程よく合っている。
中条のパジャマは、同じワンピース型で、女物のLサイズ。
パジャマを着るとき、中条は従来からパンツを履かない。それを美香にも勧めた。これまで美香は、寝る時はいつもパンティを着けていた。
ある日の夕方、中条の言うとうりにしてみると、股間に爽やかな空気が通っていて、女としての気持ちが高揚していた。
ベッドでも、そうしようと思った。
帰宅して、シャワーをして、そのパジャマに着替えたが、パンティは着けなかった。夫はそれを見て、
「美香、どうしたんだ。いつもと違うぞ。誰かに教えて貰ったのか」と疑心を示した。誰かとは、多分美香の友人、佳代だと思っているらしい。夫は、欲情したのか、美香を求めて来た。美香は、「お疲れ様」と、拒否している。
美香の頭に去来していた事は、躯を任せる精神的嫌悪、反比例して、肉体が求める快楽の氾濫、それには、虚実と真実が混じる、が並行するということ。
その日の出来事は、美香には、性の開眼だと思えていた。

四月二十八日、雷が鳴り、荒い霙がぱらつく日、美香は、桜の花びらが舞っているよう

かに見える。
桜の左手網柄の着物に、古代唐草文の袋帯を合わせた、無地感覚の江戸小紋を着て、中条のマンションを訪問。
先日、美香はエクスタシーを味わったと思っていたが、何かが違っているように感じている。それは、中条の永くも激しく、完璧の近いテクニックを持ってして、それに達したことは真実である。
だが、そうではなかったかとの不安を抱いていた。
その日、中条は、美香にある一冊の本を贈った。パム・スペー著、深井裕美子訳「もっと素敵な愛し方」。掻い摘んで読んでみた美香は、
「私たちは、セクシュアリティを、最大限に楽しむ事を、生活の中で抑制してしまっています」
「罪悪感や恐怖心、あるいは心配などが自分自身のセクシュアリティを心の底から楽しむ妨げとなっている人もいるでしょうし、セックスを完全に楽しめないようなライフスタイル（タバコの吸いすぎやお酒の飲み過ぎ、ストレスの多い生活、など）を選んでしまっている人もいるかも知れません」
そこまで読んだ美香は、すべての記述が自分に該当していると思った。
さらに進んで、
「一番気持ちのいいセックス。それは自分のセクシュアリティをよく解っている大人同士が、お互いの意思を理解しあってこそ、楽しめるものです。それには、三つのC、すなわち、Communication（意思の疎通）、Confidence（自信）、そしてCreativity（創造性）が大切です」
「この三つのCがあれば、もっと大胆に、今までとは違うちょっと新鮮なセックス体験が出来るでしょう。心の中のブレーキを取り払い、身体の隅々までを味わい、心と身体の結びつきを十分に感じながら、自分の情欲のパワーを受け入れ、最高の快感を覚えてください」
美香は考え続けた。四日前のセックスは、どのような状態にあったのかと。
自分では、頂点に達したと思う。しかし、自分でイッた振りをしたのではないか、あれは、真のエクスタシーであったか、不安に駆られていた。
中条は、さらに難しいことを言った。
「世阿弥の風姿花伝によると、『さのみ、善し悪しきとは、習うべからず』と記されている。それはむやみに、良い悪いなどと、直しては　いけないと言う意味なのです。あなたも先日のことで、善し悪しを決めることはないでしょう」
そして、中条はある提案をした。
「美香、今日はこのようにして見ませんか。Longer and Softter。永く、柔らかく、ゆっくりと」
美香は、即同意した。

自分で帯を解いた美香は、襦袢一つになった。
傾きかけた春の夕日に、純白の襦袢が茜色の染まっている。
胸元からは、官能を伴った白い肌が透けている。艶かしい女がそこにいた。
中条も自分で白いトランクス姿になって、美香を硬く抱き締めた。
ディープキス。中条の舌は上気した美香の項を這う。美香は待ちかねたように、胸をはだけ、乳房を吸わせた。その手は、中条の股間にあった。そして、エロティックな期待を持ってトランクスを剥がす。
既に引き締まった男根が上向きになっている。
美香は、膝を突いてそれを躊躇いもなく吸い込む。
堪り兼ねた中条は、美香の襦袢を放り投げて、美香をベッドに誘う。
裸の二人はもう何の計算も企みもない。中条が中指を陰部に差し入れると、そこは堰を切ったようにラブジュースが夥しく溢れ、クリトリスも甚だしく勃起している。
中条はそこに卑猥な口を宛がって、抉るように啜った。
ラブジュースが密かに匂う。
次に、中条はアヌスに挑む。美香は、驚愕して、脚を閉じようとするが、中条の頭が股間にあるのでそれは許されなかった。さらにその唇は大腿から、脹脛、脚からその指まで進む。
その指を舐められた美香は、思わず捩る。美香の目の前には逞しい男根が屹立し、亀頭が輝いている。それを耽美するように舐め回す美香。
陶然となった中条は、唸るように声をあげる。
そこで美香は哀願した。
「堪りませんね。ちょっと休憩させてください」
そこで中条は、美香を伏せさせた。美香の肌はピンク色に染まっている。その美香の腰下に枕を差し入れてピップを持ち上げさせた。
アヌスを弄ぶために。
もう抗うことの出来ない美香。
そして、自らヒップをグラインドさせていった。穏やかに。
猥褻なラブジュースを間欠的に滴らせる美香。
時間とか、理性とかを忘却した美香は、「死にそう」と喚いた。
そして、朦朧とした時間、理性、それらを永く封印しようと願った。

雨が窓を叩く音、閃光、春の嵐だった。

目覚めた二人は、お互いを見詰め合った。美香の目は宙を見ていた。
中条の目は、美香の瞳孔を見ていた。その中には、性の悦びの情念を見たような気がし

た。

美香は、超が付く位清潔好きである。

掃除、洗濯を毎日するのは、主婦の通常だろうが、何しろ美香は念が入っている。荻家は三人暮らし。

大学一年生の息子の面倒をみているのも美香である。

息子、俊一郎にはガールフレンドがいて、月一度位は泊りに来る。食事はすべて美香が作らなければならない。

俊太は、出勤するといつ帰るか解らない。俊太が午前様になっても、美香は食事もせず、待っている。その間、空白の時間帯があるが、掃除、洗濯に終止してしまう。

中条は、思いがけない美香の行動を見たことがある。

四月中旬、午後、ランチを一緒にしようと中条のマンションに来ていた。

ランチが終わると、腕まくりをしていきなり皿洗いを始めた。

まず、汚れの少ないグラスを洗い、脂の付いたものを洗い終えた。

「一人暮らしの男って、汚らしい生活をしているのね」

中条は自分では、掃除、洗濯を怠っていないと思う。美香が、洗い出したのは流し台、食器棚、ガス台、冷蔵庫、それにフローリングまでも。

スチール製の束子を取り出し、フローリング以外はすべて磨きだした。

束子に洗剤を付けて磨き、それを雑巾で拭く。それを二度、三度と繰り返す。一時間以上もその作業を続けていた。

これから出勤する美香にとって疲れる作業だろうが、ものともせず、それらをやって退けた。終わると美香が、

「流しは、自分の顔が映るように磨くのよ」

中条がそこに顔を出すと、鏡のようだった。

事程左様に、美香は家事に追われている。

中条が勧めた事は、非日常生活を創り出す工夫をすべきであるということ。

たとえば、旅行する、映画を観る、読書する、スポーツを行うなど。

そんな提案をしたのに関らず、美香の行動は変わらなかった。

「私は家庭を守り、俊一郎が大学を卒業するまで、今の生活を続けなければならない。でも、今はあなたがいる。幸せの存在とは、こういう状態だと感じていますよ」

そうまで言われると中条は手をこまねくほかなかった。

五月半ば、

「疲れました。そこで昼寝させて欲しいの」との電話が美香からあった。その日はウイー

クデーであるが、美香は休日だった。
ビールを一口流し込み、ベッドの倒れ込んでいった。
「うちでは気持ちが休まらないの」と言って眠りに入った。
一時間ばかり仮眠していたようだが、なんだか寝言を言い出した。
「パパ、抱いて、しっかりと」
美香は、俊太のことをパパと呼ぶ。
夢の中でも俊太が登場している。
「抱いてとは、抱かれていない」事を意味する。
中条が、美香の頬に手を触れると、抱き付いて来た。その行為は夫に対してだろうか、中条に対してだろうか。
目覚めた美香は、化粧を直し、出勤して行った。

荻一家は、人には言えない大問題を抱えている。
家庭内暴力。
俊一郎が生まれたのは、猿島郡伏木。そこは、田圃に囲まれた寿司屋であった。
その店を起こしたのは、俊太の父、徹。
徹は、農家だったが、その頃、政府の政策で減反に迫られていて、止むを得ず寿司屋に転業している。この地方は田舎町で、交通の便も良くなく、近所の常連客だけで、繁盛していた。
田中角栄が、日本列島改造論をぶち上げ、交通網が整備され、この地方でも、チェーン店の回転寿司屋などが出店。珍しいので客はそれらの店へと流れていった。
徹の店が傾き始め、俊太の三人兄弟の内、長男の俊太がその後を継いだ。
その頃、荻一家は、東京の中野に住んでいたが、徹の願いから、一家は里に帰り、その店で働くことになった。
そして、その店は、十六年間続いた。それは俊太と美香の働きのお陰であった。
俊太は会社を辞めてから、東京の老舗の寿司屋で二年間修業した。店を継いだ頃は、賑わっていたが、やがてその客達は、開通した道路際に建つ店へと、移っていった。
だが、美香のアイデアで仕出屋へと返還し、冠婚葬祭、お祝い席などから、大量の注文が殺到することになる。
そこでの美香の働き振りは、凄ましいと言っていい。
朝四時には起き、漁港に買出しに行き、帰宅すると俊太の母と夫婦のために朝食を作る。
そして、
店に行って下拵えをして、家に帰り、昼食を作る。
一休みして、二時には店に行く。店内を清掃し、夫と共に寿司の準備を行う。

開店は、午後五時三十分。板前は、夫、配膳は、美香。
閉店は十一時だが、それ以降も飲み続けている客には、終業することが出来ない。結局、十二時過ぎ、やっと店を閉じることになる。
帰宅して、夫婦で遅い夜食を摂り、まず夫が入浴、ついで美香が入る。風呂場は、美香が入浴した後、裸ですべてを清掃する。その時間は、夫は既に眠っていて、美香が寝入るのは、明け方一時を過ぎてしまう。睡眠時間は、三時間程しかない。
しかし、美香はＳＫＤで鍛えているので、そんな生活でも、へこたれる事はなかった。
そんな生活の中で、俊一郎が生まれた。華奢な体に似合わず、美香の母乳は豊かだった。にも係らず、美津は意外な事を言う。
「美香さん、母乳は良くありません。おばあさんが調合しますから」
それは、スキンミルク。母乳には幼児のための総合的な栄養素が含まれていて、それだけで幼児には充分だが、スキンミルクだと栄養素が、偏ってしまうことを、美香は知っていた。だが、美津の命令は、絶対で、そのことを夫に言っても、関心を抱かない。
自分で子供を育てようと思っていた美香だが、仕事にかまけていて、俊一郎の世話を美津に任せざるを得なかった。
美津は自分の子供のように俊一郎を可愛がり、どんな要求にも応えていた。
五歳までは、そうしていたので、俊一郎は美香より美津の方が実の母だと思うようになっていた。
美香には信じがたい育て方もあった。オムツ。その頃オムツは使い捨ての紙製だった。美津は自分で縫ったオムツしか与えなかった。
「義母さん、今は紙オムツの方が清潔で、手間がかかりませんです」
だが、義母は主張を曲げなかった。離乳食も当時、幼児にとって完璧なものが売られていた。義母は、それを使うのは、美香の手抜きだといい、自分で作っていた。
甘やかされて育った俊一郎は、実の母の言うことを聴かなくなっていた。
そんな生活が十数年も続く。
俊一郎が、高校生になった時、母に対して反感を持つようになっていた。
家庭内暴力とは、些細な事、時には理由もなく突発する「暴力」のこと。根底は、悲しみの感情であることが多い。
俊一郎の場合、美津、徹に甘えて育てられ母は、疎外されていた。
だが、母は、仕事をするのが精一杯で子供との接触時間が短縮されていた。
そんな状況の中で、ある日、俊一郎は暴発した。夕食に作ったロールキャベツが気に喰わなかったのか、
「お母さん、こんな不味いものが喰えるか！」と、いきなりフォークで母の腕を刺した。そこから大量の血が流れ、消毒したが出血が止まらない。救急車で病院に運ばれ、十針も縫わざるを得なかった。完治までには一ヶ月も懸っている。
高校生の俊一郎には、暴力を振るうことで自らも傷つき、暴力を振るう自身が許しがた

く、しかし、そのような許せない自分を育てたのは、母親であるという自責と他責の悪循環だと、知る訳もなかった。
母に対する俊一郎の根本的な反感は、母が酒を飲み、タバコを吸うことから来ている。
美香は、かつて芸能人であったので、酒、タバコは必需品のようなものであった。その頃でも、その習慣は捨て切れてはいない。
俊一郎の暴力は、大学一年生まで続いている。
その頃は、東京郊外の新居に移転。
俊一郎の部屋は一階、夫婦の部屋は二階にあった。
美香が二階のフォローリングに掃除機を掛けていると、階下から上がって来た俊一郎は、「煩い、この馬鹿！」と、母を階段から、蹴り飛ばした。階下まで転げ落ちた母は、脚と腰、頭を強打されて、三日程仕事を休まざるを得なかった。夫にそのことを訴えると、俊一郎を呼び、
「お前な、実のお母さんに暴力を振るったのだぞ、なぜそんな事をするのか。今後、そんなことをすると許さないぞ」と申し付けたが、具体的には、何もしなかった。
夫は、仕事が忙しいこともあって、母と息子の関係に付いて感心をそれ程持っていなかったようであった。
雷を伴った大雨が降った後、公園の桜の樹の下に、熟したサクランボが散らばっている。
中条は、去年大量のサクランボを拾ってワインズ漬けにした事がある。
「美香、サクランボ拾いに行かない」
「サクランボ？　それをどうするのですか」
「ワイン漬けですよ。三ヶ月もすれば、美味しくなりますよ」
美香は、竹で編んだ大きな篭を持って現れたが、一見、高校生のようなウェアを着けていた。その上にエルメスのスカーフ、黒のタイツの上に花柄のミニスカート。スキップを踏んで楽しげにやって来た。
二人で三十分も拾うと、サクランボは大篭山盛りになった。
中条のマンションに帰り、美香がサクランボを水で洗い始めた。
中条は所在なく、それを眺めていたがなかなか終わらない。既に三十分以上も経っている。
背後から、よく見ていると、サクランボに混ざった枯れた芝生を、一本一本指で摘んでいた。昨年中条は、そんな面倒なことをせず、さっと水で流してワインを入れていたのだが。
「美香、そんなに丁寧にしなくても大丈夫ですよ。芝生は自然のもので毒にはなりませんよ」と言ったが、振り向きもせず、摘み続けた。
そんな一件に於いても、中条は美香の性格を理解することが出来る。
清潔癖、清潔症、完璧症。
中条の頭には、ある言葉が浮かんでいた。

「幸福な夫婦は、ただ一様に幸福だが、不幸な夫婦はみなとりどりに不幸である」。そして、美香から聴いている、一日の過ごし方に付いて考えて見た。

起床は、意外と遅い。八時。その時刻でも、夫、息子も眠っている。

朝食を作り、夫、息子を起こす。朝食が終わると二人は出かけていく。

食器を洗い、キッチンを隅々まで磨く。そして、掃除、洗濯に懸かるがその時間は半端なことではない。

美香の家は二階建ての一戸建て。一回は、台所、浴室、トイレと和室、八畳、それに俊一郎の部屋。二回は、夫婦の寝室とフローリング張りのリビングルーム、南面にベランダが。

天気のいい日は、必ずと言って良いほど洗濯する。シーツ、ワイシャツなどの綿物は固く糊を効かす。乾かすのは、二階のベランダだが、ハトが飛来するので、時々見回わらなければならない。

掃除は毎日。一回の和室から始まり、息子の部屋、廊下玄関へと。

二階は自分たちの寝室、廊下、そしてリビングルーム、フローリングには、毎日ワックス掛けを。さらに、それを乾いた雑巾で磨く。

辛い仕事だか、美香にとっては、それが生きがいのように感じている。

仕事の勤務時間は午前十時からと、午後一時からに分かれている。

午後からの勤務だと、美香は自分でランチを作る。帰宅すると八時を過ぎるので、息子の夕食は殆どの場合、作り置きして置く。

帰宅して夫婦の食事の準備をする。夫が帰るのは、早くても、十時前位。

その間、洗濯物を整理し、綿物にはアイロンを当てる。夫が帰ると、一緒に食事。そして、夫が入浴。結婚以来美香が先に入ったことはない。

その間、食器を磨くように洗い、乾燥機に掛ける。夫がベッドに入った時、やっと美香が入浴出来る。入浴が終わると浴槽、フロア、壁をバスクリーナーで磨く。裸のままで。

美香がベッドに入る時は、午前様が多い。

そんな一日だが、寿司屋での生活とは、雲泥の差があると、美香は思っている。が、今の生活は幸福なのか、不幸なのか、美香には解らない。

美香は中条の言葉を想い出していた。「毎日同じ顔を突き合わせて……ウンコして……最初に失われるのは性欲」だと。

では、性欲が満たされているか、考えて見た。

中条とのセックスは、良好は状態にある。しかし未だ罪悪感に苛まれているようだ。だが、その罪悪間を払拭しないほうが良いのではと、美香は考えている。

不倫と論理、道徳の鬩ぎ合いの挟間で、幸せを見つけ出そうと考え続けているのが、今の美香の心境と言えよう。

美香は、五十歳の成熟した女になっていた。

ゴールデンウイーク。
中条にとっては、辛い日々が続く。
実は、中条は既婚者だった。
そして、結婚して二十三年後、離婚している。
その事は訳あって、美香には伝えていない。
美香も中条の“家庭の臭いがしない”雰囲気から、シングルだと信じていた。
結婚して、六年後から、中条の不倫は延々と続いた。何と、ある人と十一年も続いた事もあった。
その場合は、お互い会社員だったので、土、日、祝は休日だった。
そんな折、ふいと手紙を送ってきたことがある。
「土曜の夜と、日曜日はいつも一緒にいたのに……金曜日のシングルガールより」とのもの。
今や、その立場が、逆になっていた。
美香は土、日曜日は夫と俊一郎が家にいて、三食作り、掃除、洗濯に追われている。美香は東京に移ってからも、もう二年以上もそうして来た。
もし、中条に会わなかったたら、今もそうした生活を続けているだろう。
土、日は、変わらないが、ウイークデイには、堪能と言える変化が起きている。

一方、中条にも沸沸とした変化があった。
いつもというか、美香に会う前に、他の人と交際していたのだ。
隣のマンションに住む、良子。既婚。
良子は、一見優しそうに見えたが、アルコールが回ると狂気のようになった。
良子は、シングルで、もう一人のボーイフレンドがいた。その男と反りが会わず、中条に走ったようだ。
美香に会った時、この女なら永く付き合ってもいいと直感している。
幾度かの逢瀬を重ね、幾度かのセックス経験を持って、尚、恋愛感情は変わらない。
一方、美香も、いつも中条の言う「恋愛は、恋愛であって、不倫もクソもない。不倫こそ、まっとうな恋愛である」に共感している。
かつて中条は「ビールと女は欠かしたことがない」と、友人達に吹聴している。と言うのは、一人娘が生まれてから、パイプカットをしている。それは、不倫で、セックスを楽しむためであった。
とは言え、恋愛関係が成立しなければ決してセックスはしない。

中条は、娘が小学生になった頃から、その不倫は、連綿と続いた。その数は両手の指には、少し足りないくらい。

発端は、ハーフの女の子。後に解ったことだが、黒人米兵と日本人女性の間に生まれ、エリザベス・サンダースホームの出身。頭脳明晰で、大学でフランス語を勉強して、塾の講師をしていた。

中条が新宿で飲んでいた時、カウンター席の横に座っていたのが彼女だった。

中条は、もう舌なめずりをしていた。掘り出し物だなと。

一時間も懸からず口説き落とし、彼女のアパートでセックスに到る。

躯は、アフリカの黒人のように脚が細く長く、ヒップが二つの小山のように突出している。体臭は、日本人とは、異なっていたが、それが返って中条の官能を揺さぶった。後部から何度も交わり、果て尽くした。

朝、中条はぎくっとした。髪が茶色だった。夜は黒だったのに。しかもその髪はスパイラル状に巻かれていて、頭皮に密着していたのだ。

バーのカウンター席は、薄暗かったので解らなかったが、その髪はカツラだったのだ。彼女とは、一年間ほど続き、彼女に若いボーイフレンドができたようだったので、中条は、それとなく去った。

その後の数人は、日本人。アーキテクトの卵、モデル、スタイリスト、OL。

そのOLは、中小企業の社長の娘。

その頃中条は、南青山にオフィスを構える建築事務所のアシスタントをしていた。

そのOL、杉めぐみは、赤坂四丁目、青山通りにある広告代理店に勤めていた。

二人とも、終業は五時。めぐみは青山通りでタクシーを拾い、南青山で中条をピックアップ、Uターンして、番町ホテルにしけこむのを常としていた。

今は取り壊されているが、当時は木造二階建てで、廊下を歩いているとドアから女の呻き声が聞こえて来た事もある。

金曜日にチェックインして、月曜日早朝チェックアウトしたこともある。

「男と女を結びつけるのは、誠実さや正直さばかりではなく、不貞さえも、それを可能にする」モラヴィア

さて、中条の次の女とは、十年以上も睦み会うことになる。先に書いている吉村冬子（とうこ）。　交際を始めた頃の冬子は、営業のアシスタントだったが、名門短大を出て、入社以来秘書をしてきた。

秘書といえば誰でも描く概念だが、美形である。

冬子は、美香の世界に冠たるうウォッチメーカーの重役秘書だ。その社のオーナーは秘

書には特別の美人を選ぶという話は夙に名高い。冬子もその一人で、モデルか女優になってもおかしくない風貌を供えていた。

中条は、五歳にして母を亡くし、女の優しさを知らない。

冬子は、いつも優しかった。彼女の優しさに包まれ、中条は幸せを掴んだようにみえていた。

一方、妻は、気高い心の持ち主で、夫が不倫しているのを、知ってか知らずかこれまで一言たりとも、言及したことがない。冬子とは、毎週逢い月一度は旅行に出ている。国内は、秋田、盛岡から、京都、若狭まで、クルマで行ける所なら、海、山、湖など、数え切れない。また、イタリヤ一周もしている程の仲であった。

そう、冬子と会ったのは、あるテニスクラブ。その頃、冬子は、三十代半ばだった。だが、セックスに関しては、初であった。

中条は、これまでのキャリア?を活かし、冬子を自分好みの女に変貌させていった。それこそ男の本懐だと、自身で確信している。

「始まった事は、終わる」。その言葉の通り別れる時が忍び寄っていた。

そのイタリヤ旅行の残滓が、二人の間に溝を就くっていった。

お互い、慣れ過ぎてしまっていたのだ。

バブル崩壊後、三年経っていた。中条の会社、Office OMUは経営が苦しくなって、妻にも相談せず、一戸建ての自宅を売り払った。数人の社員を、解雇。退職金は、スズメの涙ほど。

結局、七年間で約一億円の損失を出す。

そのショックで中条は、インポテンツとなった。そのとき、中条が言ったことは、滾る本心である。

「私たちは、恋愛と肉体が、相まって結ばれていた。しかし、肉体関係が滅びれば、男と女の関係は成立しないだろう」と。

「でも私……」

言葉が出ない。そして、冬子は翳を落としながら、悄然と去っていった。

バブルがそこを打つだろうとの、風聞を聞いて、中条は、新しい会社を興し、やがて経営は、順風に乗る。

そして、あの中条の曲が出て、新しい女を捜し始めた。ターゲットは既に決めていた。同じテニスクラブの、ボーイッシュな女、枝川ふみ。恋の技に長けた中条は、意識して、その女を選んだ。

その前の女、冬子は、女っぽく、優しい人だった。

今選んだ、あるいは選ばれたかもしれない女は、男っぽい性格である。

ふみの住まいは、中条に会うには絶好のところにあった。というのは、ふみの勤める会

社は、新しい中条の会社の通勤途中にあった。
中条は、一応、社長なので、夜遅くまで働く。その頃は、社員たちは、すべて帰宅しているのだ。
「ちょっと、寄っていい」電話してきて、中条の会社に来る。そして、勝手に冷蔵庫を開け、ウイスキー・オン・ザ・ロックすをやり出す。
少し酔うと、仕事中の中条に唇をあわせようとする。が、中条は、「それは後でね」と、仕事を続ける。
十二月初旬だった。表参道のイルミネーションが二人の頬を照らしていた。
その場は、表参道の陸橋の上。ふみのキスは、激しくも、凄まじい。
ふみは朦朧でもない。が、静謐でもない。
渇していたのだろうか、欲望を剥き出ししてるようだ。
表参道を吹き抜ける冷たい風が、熱くなったふみの頬に心地よく、また、ショートカットのヘアを愛撫しているようだ。
中条は、些か狼狽している。そのときふみが切り出した。
「ねえ、うちに来ない」
アグレっシブ、突き進む情念。
歴戦練磨の中条にも、そんな女に逢った事はなかった。
そして、ふみを好ましい女だと思う。新しいタイプの女性だったのだ。
ふみは、地下鉄、千代田線、代々木駅近くのアパートに住む。
自分の歳のことは、曖昧にしか言わなかった。四十代半ばだろう。
男女の経験は、豊かだった。中条は、ふみのアパートで、就業後、過ごす事が多くなる。
その頃中条は、自宅を売って、港北ニュータウンの一戸建て賃貸に住んでいて、代々木駅から自宅への最終はＰＭ１１：４５だった。
週、二回程度逢い、お互い、悦楽を貪り、果てる。
その始まりは、いつものパターン。「ちょっと、寄っていい」。
そして、代々木駅近くで、食事と、アルコール、シャワーして、ベッドイン。PM9:00を過ぎている。その後、二時間位は、坩堝の中。
そんなラブアフェアーが二時間以上も続く。
都心に近い代々木でも、二月には、路上の水溜りには、薄氷が張る。
その頃になって、中条はふみの”負”に向かうような心を覗いた事があった。
思うに、「男と女の間には、暗くて深い谷がある……」（作詞、能音利人）
その谷間が、いつの間にか深くなっていたのか。
二人の年齢差は、九歳。しかし中条の体力は充実していて、ふみに対するセックスは満たされているだろうと思っていた。
ふみは、中条のどこかに老いを感じたのであろう。後に考えたところ肌の色ではないかと思った。　それは、もう中条にとって、どんなに鍛えても消すことが出来ない現象であ

る。

暫くして、ふみは悄然と去っていった。振り返ることもなく。

美香の家の南西に、三坪程の庭があって、アジサイが三色そろって咲きはじめた。

ちょっと訊きたい事があり、それらの花束を抱えて中条のマンションに向かった。花束にあわせるように、緑、黄、青のぼかしの郡上紬を着けていた。部屋に入ると中条が、フィンランド製の透明なガラス器にそれを飾りながら、

「美香、今日の着物はこの花のように、ぼかしが映えがしてますね」

「ありがとう、でもこれはほんの一着で、箪笥には何十着も置きっぱなしなんですの」

「何十着？」

「ええ、私が自分で買った物もあるし、先生に買って戴いたのもあります」

「先生？」

「お話しませんでしたが、先生とは、私がSKD時代、援助戴いた方です」

「援助？」

「はい、旅行にも連れていって戴いたし、楽屋にも良く見えられていましたの」

「じゃ、その先生とお付き合いを？」

「いいえ、そんな関係ではありません。特別な後援者ですよ。中条さん、それって嫉妬じゃありません」

「懐疑心を持ちますね。これはやはり嫉妬でしょう。私には今までそんな事を抱いた経験がありませんが」

「まあ、嬉しいこと。あなたが嫉妬するなんて」

「人間誰でも、嫉妬心は起きるものだと思います。美香が相手ならなおそうなるんだ」

恋の百戦練磨者、中条でも嫉妬に噎せる事がある。

暫くして、美香は切り出した。

「私、この前あなたに抱かれてから、少し出血していますの」

出血と聞いて中条は、陰部からのそれだと思った。美香が帰ってからインターネットで調べると、下記のように記載されていた。

概要

若い女性の不正出血の原因の1つとして、頻度の高い疾患です。「びらん」とは「ただれている状態」を意味します。したがって、病気（疾患）というより症状ですから、「びらん」の原因が何かを医師に確認してもらうことが大切です。

症状

不正出血、接触出血

子宮頚部は、陰部の皮膚、外陰、膣と連続性に扁平上皮（しっかりした細胞）で構成されています。一方、子宮の奥（子宮体部）は、腺細胞（繊細で出血しやすい）で構成されています。その腺細胞は、内膜から下がってきて、子宮の出口（頚管）のあたりまで続いています。そして子宮頚管で外から来た腺細胞とぶつかり合います。

若い女性では、女性ホルモンが十分に分泌されているために、ホルモンに対する感受性の強い腺細部が増殖し、このポイントが頚管より外側にどんどん広がってきます。そうすると、本来子宮口から少し入ったところにあるポイントが、子宮の膣に飛び出したところにあるために、たとえば、セックスの際にペニスが子宮膣部にあたると、もろい腺細胞から容易に出血が起こります。そして、この部位は、赤くただれてみえます。

これを「ただれている」ということで、「びらん」と呼びます。

したがって、子宮膣部びらんは若い証拠ともいえます。

これを読んだ中条は、

「おめでとう、美香、あなたは若返ったのですよ。女性ホルモンが十分に分泌されたため、子宮の膣が飛び出してきて、そこにペニスが当たってびらん状態になったようです。子宮膣部びらんは若い証拠でしょう。予防方法もないようですが、セックスを控える必要もないと書かれていますよ。あなたはここ十年以上もまっとうなセックスをしていなかったようです。この前のセックスによって若く蘇って、出血が起きたのでしょう。心配することはありませんよ」

その電話を聞いた美香は、にんまりと微笑んでいた。永い間、夫と交わっていてもそのようなことは起きなかった。快感も得られていない。

今になってやっと女として成熟したと感じた。それは、中条と会ってから始まったのである。

そして、中条に対する、蜜のように甘い想いが封印されていった。

四、成熟

梅雨が明けようとしていた。

荻一家に不条理なことが続く。

中条の息子、俊一郎はもう暴力を振るわなくなった。母に対しては、優しく接していて、気力も充実していたので、自分の将来のことを考えはじめた。
母の血を継いでかダンスを習うようだ。大学は法学部だが、感性を要するダンスとは一興ものだと、父、俊太は考えていた。
そこで美香が気付いた事。
将来エンターテイナーとして、舞台に出るには、歯が美しくなければならない。美香は生まれつき、歯が丈夫で歯並びも美しかった。五十歳の今まで歯医者に罹った事もない。
俊一郎は、父の血を継いだのか歯並びがよくなく矯正する必要に迫られていた。夫にその話をすると、今、会社は売り上げも下降傾向にあって利益も低下しつつあると言う。
矯正費を稼ぐには美香が働かなければならない。美香は、考え続けた。
Mデパートのパートタイムを午後からにして、午前中はどこかで働くことだった。
梅雨の晴れ間、ある飲食店のアルバイト募集の張り紙を見つけた。今や、売れ筋となった和食店である。
条件は料理の経験が深い人で、仕事時間は、午前十時から午後十二時三十分。それならMデパートいく前に仕事が出来る。
面接は、何の逡巡もなく終了。店長は、明日から仕事して欲しいという。
翌日から、その飲食店で働き、続いてMデパートで夜八時まで。それが五日間続く。
美香にとっては容易い仕事だが、精神的には、強く感じていた。そのために体力が消耗、風邪を引き、下痢、嘔吐を繰り返すこととなる。
点滴をすれば、少しは回復するが、その日は、俊一郎がダンスを習う日で、遅くまで帰らず、夫も月末で忙しく、深夜帰宅の予定だった。
美香は、その日は久しく料理、洗濯もせず、寝入った。翌日はもう元気を回復、また午前、午後と根を詰めている。
なぜそのような無理をするのか。それは美香のプライドを賭けての戦いだった。
俊一郎は義父、義母に育てられたようなもの。その後実母に反抗し、暴力男児になった。それでも美香は、我慢して、接していたので、大学生になった頃から、暴力は消滅していた。
一方、夫は仕事にかまけて家庭を疎かにしがちだった。
家庭は美香が守らなければならない。夫にも元気で働くよう、料理、洗濯、掃除を完璧に熟さなければならない。
美香の完璧主義は、体力の、精神力の限界を知らせていた。
そこにまた事件が起きる。
俊太が営業接待していて、泥酔していた。下車駅の階段で頭から転倒、右手を骨折、石膏で固めていたので、食事が自分で出来なくなって、美香が口に運ばざるを得なかった。
そうした日が、一週間も続き、流石の美香も疲れ果て、中条のことも念頭から外れていた。

が、遂に中条に電話して、「あのベッドで昼寝をさせて」と言ってしまった。
「美香、それなら自分のベッドで眠れば……」
「いいえ、この家にいては私の心が休まりません」そう言い残して、荒い気、吐息で中条のマンションにたどり着く。
着替えもせず、ベッドに横たわると五分もしないうちね、寝入ってしまっていた。目を覚ましたのは、二時間後、中条がそっと手で美香の頬を撫ぜると、美香は滾るように抱きついてきた。
「ありがとう、中条さん、すっきりした気分になりました。ここは私が安堵出来るところなの。出来ることなら一晩でも一緒にここで休みたいのですが」
美香は中条を信頼し切り、安らぎの時間を過ごす場所として、最高のところだと認識したらしい。

梅雨が開けるらしい。雷が光り、風に乗った大粒の雨がガラス窓を叩く。
その日、美香が着けて来た雨ゴートは、江戸時代の被衣の布を再現した浅黄色の張りのある透ける生地に、友禅で鉄線、白百合、葉の荻などの夏草を描いたおしゃれなもの。それに紫色の和傘を持っていた。
冷酒で乾杯。冷奴を摘んでいると、お互い欲望を覚えたのか、ベッドイン。穏やかで、たおやかな時間が続く。
二時間もそうしていただろうか、美香は三度エクスタシーを迎えたが、中条は射精しなかった。
「中条さん、どうして？　私を好きでなくなったのでしょうか」
美香は、不安を隠し切れなかった。
「じゃ、ないですよ。あなたを何度も楽しませようと思って、奮闘したのだが、そのため自分が疲れてしまって終わらなかったようだ。ごめんなさいね」
「私、一緒にいきたかったの」
「では、これからはそのように考えますよ」
美香は、いまは共に堕ち行く悦びを、求めていたのである。
中条は、男として、もっと複雑な事情を持つ。
まず、母の顔を知らない、彼が五歳のとき、死亡しているが、二歳の頃には乳母に預けられていた。母に抱かれた記憶もなく、その優しさを知る由もない。仏壇に飾られた写真の記憶のみが母だった。姉がいて、食事、洗濯などの面倒を看て貰っていたが、それは母の代理ではない。成人になっても普通の母のような女の優しさを心も体も求めていた。
そのためか、どうか、不倫続きの年を重ねる。
恋愛し、躯の関係を持つことは、一種の甘えだろう。彼はその甘さを追い求め、そのために女に尽くし、その代償を求めようとしていたのである。

これまで不倫相手にそうして来たが、裏切ったり、裏切られたりしたこともある。あのアルベルト・モラヴィアが言うように。
美香は芸能界で揉まれてきたので、人情、義理に厚い。人を裏切ることはないだろうが、男女の関係ではそのようなことが起こり得ると思っている。
そんな折、中条はかつて読んだアンリ・ド・レニエの言葉、
「恋は最も変わり易いと同時に、最も破壊しにくい不思議な感情である」を想いだしていた。
また美香も先生から教えられたドライデンの言葉、
「恋の苦しみは、あらゆるほかの悦びよりずっと愉しい」を想った。
中条は、特別小説好きではないが、トーマス・ハーディの「テス」を熟読していた。
ハーディの言葉、
「分別を忘れないような恋は、そもそも恋ではない」ということにも共感している。二人は恋の病によって、分別さえ忘れているのだろうか。いずれにせよ、アントワル・サルの言う「恋は、エゴイズムだ」なのだ。
そのエゴイズムによって、衝突を起こしたことがある。
近くの公園に数本のヤマモモが植えられていて、梅雨が明けると茜色の実がなる。中条の提案でヤマモモ摘みをすることとなった。
その実は、樹に登って一粒一粒手で採らなければならない。

その実が実るのは、関東では伊豆高原が北限、ここ多摩地域では黒紫色になるまで熟さなく、茜色で止まってしまう。
美香は、和歌山で子供の頃から、樹に登って熟したものをよく食べいた。
中条も摘んだ事はあるが、食べたことがない。中条が樹に登って実った小枝を、下で待つ美香に向かって投げ落としていた。美香はたまたまその日は白いシルクのブラウスを着けていた。最初、中条は一房ずつ5、6投げ下ろしていたが、面倒臭くなたのか、大きな枝を投げ落とした。
それが美香の頭上に落下、ブラウスが茜色に染まっていた。
「中条さん、止めてください。私のブラウス、台無しになってしまうわ。これはクリーニングに出しても白くならないのよ。どうしてそんな乱暴な事を」
「ごめんなさい、つい……」
「あなたって、そんな方とは思わなかったわ、自分勝手よ。私をそんなに邪見にするなんて」
「だって、あなたが大量に欲しいと言ったので」
「程ほどにしてくださいよ」
そんな子供染みた事だが、もう慣れあっている二人は自己主張ばかり通うそうとしている。それは、エゴイズムの発露と言えよう。

エゴイズムを繰り返せば、萩原朔太郎の言うように、
「すべてを通じて、恋愛は忍耐である」という条件が崩れてしまう。
中条は考え倦ねたが、かつての経験からある言葉を見出していた。
「恋とは、巨大な矛盾である。それなくしては生きられず、しかもそれによって傷付く」
（亀井勝一郎）
そんなこんなで二人は、お互い理解しあった。そして、平穏を取り戻していた。

陽気な夏の日差しが、公園の池の水面を輝かせ、水温が上昇する季節。
池には、成長したクチボソ達が遊泳している。
中条は子供のように、それを獲ろうと美香を誘った。網とバケツを持って掬うと、数匹のクチボソが網に入っていた。中条の部屋に持ち帰り、ガラス製の大皿に入れて泳がして見た。水道水を使ったがクチボソ達は穏やかに泳いでいる。
しかし、二人の間は穏やかな事態ではない、ある状況に置かれていた。
それは、お金の問題だった。
その頃中条は、一人で仕事をしていたが、殆どそれが無くなっていた。その月は、生活費用が足りなく、美香に助けを求めた。
美香は、パートタイマーとして、二店で稼いでいたが、それらは息子の歯の矯正費に充当されていた。美香は、彼の窮状に援助したいのだが、余裕が出ない。

中条は友人幾人にも救済を求めたが、渋面をしていたので、已む無く美香に依頼していたのだった。電話に出た美香は、
「そんな話では、私、引けて来るわ」と、哀しそうに言った。
引けて来るとは、恋愛感情が失せて来ることを意味する。美香も、中条もお互い惹かれている。が、お金の問題で恋愛感情が消滅するのは悲しい限りであろう。中条には暗鬱の日々が続く。それでは事態を抹消することが出来ない。
そんな日々の中、同じテニスクラブの老婦人、その方には、中条は時々テニスを教える仲だったので、その話をどこで耳に入れたのか、

「じゃ、わたくしが……」と、援助を申し入れてくれたので、中条は立ち直ることが出来た。そのことを美香に報告すると、
「ああ、良かった。私、何もしてあげられなくて、ごめんなさい」
ごめんなさいは、本来中条が言う言葉だろう。それなのに美香が言ったのは、芸能界で揉まれた苦労人だったからだろうか。
そんな健気な美香だったので、中条は恥じながらも、美香に更なる愛を感じ、三日後に逢いたいと申し出た。

「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結び、久しくとどまりたる例なし」鴨野長明『方丈記』。
今の中条の心情は、正しくこの言葉に当たる。
その日は、三十度を超えていた。
「やあ、涼しげでいいですね」
移転するとき、大部分の着物を捨てたと中条は聞いているが、今でも着物の在庫は、夥しいようだ。
美香が着けていたのは、宮古上布。紺地に白の細かい絣。生地に柔らかさと艶が、体にしっくりと馴染んでいた。
“究極の織物”と言われる宮古上布の絣は非常に細かい。手織りではとても間に逢わないので、機を使う。経糸は木綿、緯糸はやがて上布となる麻。切れる寸前までピンと張った経糸に、麻糸をしっかりと打ち込んで行く。染めたときに経糸に抱かれた部分が白く残り、絣模様となる。
「そうお思いでしょうが。でも、着る人にとってみれば、かなりの苦行に近いものです」
「どうして？」
「私、今日、長襦袢を着けていて、それが暑っ苦しいのです。いつもは美客襟といって、襟だけが独立したしつけ襟を着けています。それはうそつきといって、肌襦袢と長襦袢を合体させた肌着のことで、身頃の部分は、肌襦袢、襟と袖が長襦袢になっているものを着けていますの」
「じゃ、今日はなぜ長襦袢を？」
「それは、中条さんに失礼だと思って」
中条は、見詰めていた。美香の袖口を。腕を動かす度に、袂の脇や袖口から、ほんの少しだけちらりと覗く。ほんの少しだめしか見えないところに凝るなんて、いかにも美香らしいと思った。
帯は、着物一枚に、三本あればいいというが、今日の美香の帯は、レモンイエロー地に青い花の夏帯で、洋服感覚の着こなしだった。
バッグもアニエスベーの籠状の物を携えていた。これも洋服感覚。
だが、そのバッグから、微かな香りが漂う。それは、匂い袋を忍ばせているのだと、中条は気づいた。
子供の頃から、着物に慣れている美香は、一番気になるのはおはしょりだという。おはしょりは前後左右、長さをピッタリ合せ、しかし、腹部に密着していなければならない。若い人はそんなことは気にせず無造作に閉めているので、みっともないと、美香は憤慨している。

中条は、美香の帯を解き、着物を剥がし、長襦袢を取ると、袖先にレースの涼しげな肌

襦袢が現れる。
バストに右手を差し入れ、既に勃起している乳首に触れる。
美香は、ピクンと動き、中条の熱い唇を吸う。
更にその手は股間に向けて這いずり回り、秘所を弄るとパンティではなく、麻のステテコを着けていた。
陰部は、以前と違って真紅の薔薇色になっていて、愛液が溢れ、あの逞しいものを待ち焦がれているようだ。
そして、それが浸入。ゆっくりと、穏やかにインアウトを繰り返す。
二人はもう快楽の世界を泳いでいた。二時間以上も続いたろう。
それには訳があって、実は中条はバイアグラを服用していた。彼の歳では四、五十分が精一杯だろう。
その間、美香は確かに「イク」と四度叫んだようだ。
中条はなぜバイアグラを使うのか。
男は、女を悦ばせ、それによって自分も興奮し、満足を得る。それが男にとって、喜びでもあり、楽しみでもある。
二人はもう感づいていた。ジョン・ドライデンの言うように、「恋は限りない方法で、私たちを喜ばせる。ただし、私たちから平安を奪い去ろうということを除けば」
二人の間には、確執も意固地も存在しない。
しかし、終焉が近いということも感じている。

中条は、想いだしたことがある。
梅雨の真っ最中、栗に花が匂っていた。その香りはセックス経験が永い女ならザーメンの匂いを感じるんだろう。美香も例外ではなかった。
雨がしのつく夜、俊太が帰宅していないようで、美香が電話して来た
「私、今、あなたが欲しいの。抱いて欲しいの」
中条は、直感した。電話セックスを求めているのだと。
「美香、ほら、私の唇は名美香他の乳房を舐めているよ」
「感じるわ。もっと、強く舐めて」
「じゃ、次はこうしよう。股間を開いて。そう、そうです。アンダー・ゼアーですよ」
「アンダー・ゼアー？」
「そう、日本語で言えば、あそこですよ」
「恥ずかしいわ、せも、下を入れて」
「ほら、入れたよ、クリトリスがこんなに勃起していますね」
「私、あなたのペニスを舐めたいの」
「こんなに大きくなっているんだ、そう、もっと奥へ」

美香の舌は、イメージで、亀頭をなぞっていく。
ううっと、声を漏らす中条。
「指を入れて、アンダー・ゼアーに」
「ああ、卑猥な液が溢れて来たね」
「入れて、入れて、ペニスを入れて」
「入ったよ。ピストンするよ」
「だめ、そんなに激しくしては」
「じゃ、九浅一深といこう」
「ああ、感じてしまうわ。もう、イクかも知れない」
「そんなに早く。もっと、長引かせて」
「解った。そうして、一緒にイクとしよう」
「私、あそこを閉じるわ。この体位が好きなの」
「じゃ、そのままで、ピストンを繰り返すね」
「そうそう、その調子よ」
美香がもう達しようとしていることが、中条には解っていた。
そして、五分間の沈黙。
「ああ、もうどうなってもいい」
「さあ、一緒にいこう」
そして、二人は果てた。
初めての電話セックスだったが、その成果は二人の関係を甦生させるようにみえた。

台風八号が、東シナ海に留まっていた。関東地方には、暗雲が張り付き、美香は、気分が晴れなかったが、それでもこれからの人生に思考を巡らせていた。
考えだしたことは、新しい仕事に挑戦すること。それは、昔取った杵柄、日本舞踊。
お互い、知り尽くしていた二人であったが、どこかに暗くて、深い谷が横たわっていた。

五、新しい道

美香は、中条に行く言われていたことがある。
そんなに家事と仕事に追われないで自分の人生に悔やむ事がないよう何かこれまでとは違った生き方を準備すべきだと。更に、あなたは芸能界に生きてきた方だから、その感性を活かせる道に進むべきだと。
美香の目指す道は、ひとつ、日本舞踊。

二月。公園の池に薄氷が張っている。
今美香は、いつもより三十分早く起き、ジョギングを始めた。
一日目は、十分も走れず、息が切れ、その場に座り込んでしまった。
二日目は、十五分走れたが、疲れ果て、仕事を一時間遅刻している。
それでも美香の、自分への挑戦は、飽くことを知らなかった。
夫に相談してみたが、何のアドバイスももらえなかった。
どうすれば早く日本舞踊の世界に戻れるのか。技術的には、明快だが、この体力では日本舞踊は成しえない、そんなある日、中条を訪ねた。
「美香さん、頑張っているようですね。でも、あまり体力を消耗するとまた風邪をひきますよ」
「そんなこと、構っていられません。私、早く日本舞踊を教えたいの」
「そんなに！　ではね美香さん、“継続は、力なり”といって、ならジョギングをゆっくりと、永く続ける方がいいと思いますが」
美香は、その一言で納得した。そして翌日からは、確実に三十分ゆっくりと走る事にした。一ヶ月もすると苦しさが失せて、食欲も増して来た。細った躯には、筋肉が付いて、重い着物を着けても楽に踊れる程になっていた。
和歌山の叔母、千春に連絡を取ってみると、既に引退していたが、その一番弟子が跡を継いで、舞踊教室を継続いていることが解った。
美香は、新幹線、阪和線で、故郷に向かう。
教室を任されているという番匠霞が迎えに来ていた。
霞、四十九歳。和歌山城近くの汀町に生まれ、窓外から、和歌山城を見上げながら、育ってきた。父は県庁の幹部で、後、市会議員までなっている。その夫婦は、霞と二人の息子を儲け、霞は子育てに専任していたが霞が小学校を卒業する頃、日本舞踊を習いだし、師匠である千春にも認められ、三十年間仕え、その情熱が認められ、跡を継ぐことになった。
美香は、叔母の家に泊って、夜、地酒をやりながら、
「美香ちゃん、あんたねー、努力家で、天才的でもあったんや。今からでも、遅そうないと思うんや。霞に付いて三ヶ月もすれば、元の美香ちゃんに戻るよ、きっと」
三か月と聞いて、少々の動揺はあったが、かつての自分を取り戻すには「継続は、力なり」である。
舞踊教室は、新築されていて、和歌山南港から連なる養翠園のそばに移っていた。
養翠園は、紀州徳川家歴代藩士の中でも、文化に造けいが深かった第十代藩主、治宝が、千八百十八年から八年間の歳月を掛けて造営した別邸、西浜御殿の庭園。老松に囲まれた池と泉、回遊庭園には、海水を取り入れる池があり、水門は治宝が訪れる際の通用口でも

あった。
踊りの練習は、朝八時から始まり、午後四時に終わる。昼休みは、一時間で、叔母が作った弁当を食べていた。ベンチに座って潮風に吹かれていると、気分が高揚し、中条のことを想った。今、彼はどうしているのだろう、若い女を連れ、テニスコートで彼女の手を握りながら、コーチをしているのではないか。そして、シャワーして、ベッドに誘っているのではないか。
だが美香は、そんな想いを立ち切って練習に励んだ。

和歌山の夏は、東京より暑い。毎日が、疲労困憊状態だった。
三ヶ月掛かると聞いていた美香だが、一か月もせず、霞の芸を習得していた。
そして、美香の最も得意な舞を披露して、叔母、霞にお礼を言い、自宅に帰る。

さて、舞踊教室を開こうとすると、いくつもの難関が待ち受けていた。
この地域の住人は、音楽家、茶道、花道、香道、和楽器奏者は元より、日本舞踊の名取も、多数暮らしている。カルチャー教室が三社もあって最も格式の高いそれは、Ｆカルチャーセンターの最上階にある。
日本舞踊教室も開設されているが、先生は吾妻流の名取。美香は西崎流。その知名度は甚だ低い。自分をPRするにはパンフレットが必要だ。
中条はアーキテクトだが、中条はグラフィック・デザインも出来るので中条がデザインし、美香がコピーを書いた。
キャッチフレーズは『元一ＳＫＤ。継続は力なり』
教室は、数箇所当ってみたが、結果、自宅近くの小学校の廃校を教室として使う事となった。
この地域では、老齢化が進み少中学生が減少、数校が廃校となっていた。そこでは各種の教室が開かれ、ＮＰＯも活動いている。
パンフレットの効果があったのか、六人が入門を申しこんで来た。
直ちに練習が始まった。
美香は、稽古には厳しい。六人の弟子はそれでも頑張って美香に付いて来ている。
この教室には、冷房がない。着物を着けているので、弟子たちは大汗を流しながら、稽古に挑んだ。

日本舞踊は、構えを見ただけで上手、下手がわかるという。
六人は初心者に等しいと見えたので、美香は構えから教え出した。
構えは、肉体表現の基礎となる体型を整えることだが、そればかりでなく、精神面も伴

っているからなのだ。
入門した六人はシングルが二人、中年の主婦が二人、六十歳を越えた方が二人。問題は、中年の主婦だった。中、高校生がいて進学に頭を悩ませ、かつ、夫との関係がスムーズに行っていない様子。そのため、彼女たちには、精神統一が出来ないので、美香はその詳しい事情を訊いてみると、
「実は私、主人とセックスが合わないの」と恥じ入りながらいう。
美香が答えたのは、
「余りにも永い関係なので、新鮮味の乏しいのでしょう。一度、不倫でもしてみませんか」
不倫と聞いたその方は、美香の顔を眺め直し、
「それでは、師匠も不倫しているのですか」と訊いて来た。
美香は、それには答えなかったが、平然と苦笑していた。

八月末日、蒸し熱い日だった。
中条から突然電話があり、涼しい所に行かないって誘ってきた。
涼しい所とは高原や山の温泉かと想ったが、意外な事を言う。
「美香、八尾って、知っている？」
「やつお？」
「おわら風の盆って聞いた事がありますか。富山市から電車で三十分もかからないでしょう。九月一日から三日までそのお祭りが行われます。あのもの哀しい胡弓の音（ね）が、日本人の心を捉えて離しませんよ」
そう言われた美香は、稽古を休んでまでそこに行こうと思った。
八尾には旅館が一軒しかない。急な旅行なので二人は富山市街のホテルに泊まる。
九月二日、高山本線、富山発、十五時十九分、越中八尾着、十五時四十三分。
この街は、駅から小山に向かって坂を登って行く。その坂の一番上の方が最も賑わう東新町、諏訪町。

駅から五分も歩くと、もう胡弓、鐘、太鼓の音が聞こえて来る。
美香は家を発つ時、チノパンとポロシャツ、それにスニーカーを履いていたが、ホテルで着替え、浴衣を着ている。
それは秋を感じさせる秋草文様。本藍を二度染めし、糊落としをした高級品。それにお腹の中央に花模様が描かれた、茜色の名古屋帯を締めている。
絽の浴衣に各帯をしているのは、中条である。
この街は山の上から、井田川に向かって浅い水路が設けられていて、その水流が郷愁を誘う水音を立てて流れている。登って行くと石畳の道に入る。

そこには格子窓の家が連なり、万灯や数千個の雪洞が飾られている。
諏訪町に着いた頃には、まだ薄明るかったが、もうそれらの照明が石畳を照らしていた。気が付くと、蛍光灯がどこにもない。多分こんな街は日本中どこにもないだろう。
幔幕が張られた石畳では、踊りが始まっていた。
女性の着物は町それぞれに工夫を凝らし、白地に薄桃色、薄青、薄紅などを着けている。井草の深編笠に、白足袋の女性連が二列、三列となって踊りながら、坂を登って行く。先導するは、黒半纏姿の男衆。胡弓、鐘、太鼓、三味を奏でている。
「深編笠って、そこはかない色気がありますね」
「いや、美香だって色っぽいよ。その浴衣姿は」と、中条は切り替えした。
お互い誉め合っていたが、もうすぐ別れる時が来るのを感知していた。
中条は情念を込めて、
「今日は、最後の夜にしよう」
それがどういう意味なのか、美香は過酷にも知っていた。
帰りの社中、二人は暗黙の世界に没入していた。
富山市外に帰ると、もう十一時を過ぎていた。
街中にそっと佇む居酒屋で、ヒラメの刺身、地酒の「越中鬼ころし」を注文。それはオリジナルの壷徳利に入れられていて、端麗辛口の通向きのもの。
アルコール度は十八パーセント。その壺は黒褐色に白地で「鬼ころし」の文字が描かれ、恐いような風体だった。二人の行方を暗示するような酒であった。
二人して瞬く間に二合を飲み干した。

「今夜は最後ですからね、悔いのないよう堪能させてくださいね」
美香の眼は、哀願を込めて潤んでいた。
中条は平然として、「ええ、そのつもりです。あなたに忠信からの私を差し上げましょう」
食事を終え、富山湾を見渡せるバーに座る。二人とも愛煙家なので、タバコに合うリキュールを選ぶ。美香は、フランス製のグラン・マニエ、アルコール度は四十パーセント、中条はデンマーク製のヒーリング、アルコール度は二十五パーセント。
既に酔っ払っていた二人だったが、最早駘蕩状態だった。
凪いだ富山湾は十六夜の月に照らされ、鈍く輝いている。
カウンター席で、チークキスを交わし、ルームに戻る。
美香はシャワーを……と言うが、中条はそれを拒んだ。それは美香の汗の匂いを味わいたかったからである。
美香も中条も下着は着けていない。中条は自分で各帯を解いて、全裸になり、窓際に立った。初秋の湯湯とした月の光が差し込んでいて、テニスで日焼けした裸体が逆光の中で逞しく滑っていた。
美香も自らすべての帯を解き、浴衣を脱ぎ捨て、白い肌を中条の眼に晒した。

それを眺めていた中条の男根は、なまめかしく熱していた。
美香もいつもより愛液が滾っていた。
窓際に寄り添った二人はしなやかに抱き合う。そして、美香は跪いて中条のそれを愛撫する。美香の髪を撫ぜながら、
「美香、愛していました。でも今夜でお別れですね。今は二人だけの時間でしょう。二人していきましょう。二人の道の果てまでも」
その道は、情念の道、躯と躯の道、だが、終焉は近づいている。
「ありがとう、中条さん、これで潔くお別れですね」
「ありがとう、美香。あなたは私にとって忘れ難い方です。これからも一人の友人としてお付き合いくださいませんか」
「ええ、私からも、そうお願いします」

秋の日は釣瓶落としと言うが、五時を過ぎれば薄暗くなる。
美香には十人の弟子がいて、忙しく、体を休める時間は殆どなかった。
夜になると立ち眩みがする。それは疲労のためか、低血圧体質から、来るものだろうと、薬も飲まず、医者にも掛からなかった。
そんな日が一週間も続いたので、夫に相談すると、点滴で治るだろうと言う。
美香は茨城で寿司屋だった頃、疲労で点滴を受けたことがあるが、五十分もかかり、終わった後、腕が腫上がっていた。夫には、そう言われたが今はその気持ちが湧いて来ない。
久し振りに中条に電話して、尋ねてみた。
美香は感性的は女性でパソコンを操ったことがない。中条は、アーキテクトなので、それには習熟している。
中条が「立ち眩み」を検索すると、鉄欠乏性貧血だと、表示された。
「血液中のヘモグロビン濃度が低下した状態を貧血と言いますが、鉄欠乏性貧血は、貧血の中でも最も頻度の高い疾患である。鉄の吸収が不十分な場合や、消化管からや月経などの出血により、体内の鉄分が低下した場合発症する。一般的には鉄分の補給により、回復する、予後良好な疾患である」
そのことを電話で聞いた美香は、あることに気付く。
自分はここ六ヶ月生理がない。なので、月経の出血とは考えられない。
そして、自分が閉経したのだと判断した。
巷間、閉経した女は安心してセックスを楽しめるというが、要は心の問題である。中条の場合はパイプカットしていたので、美香は安心していた。では、美香の鉄分の欠乏はどこから来ているのか。
美香は、あの熱い夏の日を想い出していた。昼食にはそうめん、冷麦ばかり食べていて、野菜、魚、肉類を殆ど食べていなかったからである。

中条に訊いて見ると、鉄分を補うには、サプリメントがあって、近くのドラッグストアでも販売されているが、アメリカの通販会社、Puritan’s Pridede では、かなりの安価で販売している。

例えば、FERROUS SULFATE,28mg,100錠、4.8$、400円くらい、それに送料、手数料がプラス25％。今はバーゲンでbuy2,get3 Frreeをしていますから、一瓶買うと2瓶が無料となります。航空便で、一週間以内に着きますので私がインターネットで買って置きます。

それは、六日後に到着、美香が一日、４錠ずつ飲む。三日も経つと立ち眩みが少しずつ消えていった。

閉経した美香は、誰と付き合っても構わない位の気持ちを、ある程度持っていた。

そんな折、ある出来事が起きる。

弟子の一人が、夫を伴って、稽古の教室に現れた。その日は、何も起きなかったが、一週間後、その方から電話があってホテルのロビーでお茶でもいかがと言って来た。

その男は、かつてＳＫＤのファンでファイブフェザーズを見ていた。

美香に会ったとき、どこかで見たことのある顔だと思った。その帰り道、美香の踊り方なら、城遥だと考えて、妻に聞くと城遥は荻美香であると判明した

美香は当然その男を知らない。しかし、中条とは異なったタイプでダークグレーのスーツを着こなしてていた。少しだけ興味が湧いた美香はそのホテルで会ってみた。その男は林隆と名乗って、

「私、城さんに憧れていました。もうこんな歳になったのですが、一度二人で、いや、萩美香さんと会いたいと思っていました。今こうしてお話してみますと、あの頃の少女っぽい方ではなく、女盛りの色っぽい女に見えますね」

「ありがとうございます。ところで林さんのお仕事は？」

「市役所に勤めています。大学を出て、ずっとそこで」

「お仕事の時もそのスーツで？」

林は、見学に来た時と同じようなグレーの背広を着けていた。

「今夜、お食事でもご一緒に」

「奥様は同お思いでしょうか」

「いや、妻には言っておりません。私一人が勝手に考えた事なのです」

美香は、相手の話し振りを観察していた。どうやら、この男は真っ正直な人物らしい。とすると、中条のような複雑な人生を送った男ではない。なので、冗長な人生を送った男だと、判断せざるを得なかった。

「残念ですが、今夜は友人と会うことになっていますので」

林は、執着を残した様子で去っていった。

Mデパート前の大通りに、ジングルベルが鳴り響いている。
あの日本舞踊教室は、順調に推移していた。夫、俊太は今の会社を辞め、自分で別な会社を興そうとしている。
息子、俊一郎は大学で勉強の傍ら、ダンスの練習に熱中している。
最初、中条に会ったにはジングルベルを聞いていたときである。
八尾で、お互い別れる気持ちが合意していた。ジングルベルがそれを蘇らせた。もう一度、会って見たい、そんな欲望が逡巡している。
美香の舞踊教室は、年末、年始は稽古を休む。
クリスマスイヴは自宅でご馳走を作って、家族三人でお祝いするのが、それも終わっている。その後は、いつものように食事作り、掃除、洗濯をするだけで済んでしまう。
暮れも迫った凍える寒い日、躊躇しながらも中条に電話する。
中条の仕事も年末年始には行わない。そして、それとなく美香のことを想っていた。電話に出た中条は、
「美香さん、何だか話し方が違っていますね」と意外な事を口にする。
美香自身には解らなかったが、男っぽい話し方をしているとようだ。
「私、決めた。あなたにもう一度会いたい。そう、明日。明日よ。いい。時間に遅れないで。ダメよ、私を待たせては。食事、作って置いてね」
そんな話振りを聞いていた中条は、美香が男っぽくなったと感じたのだ。
電話が終わって、美香がなぜそのようになったのか、考えてみた。
中条との恋愛、ましては不倫によって、自己革命が起きただろうか。
あるいは、自立した自分を意識したのだろうか。
「恋は、火と同じように絶えず揺れ動いていてこそ、保たれる。期待したり、恐れなくなったりしたら、もうお仕舞いだ」ラロシュ・クーコー

かつて、美香は女らしく、可愛い人であった。漸く彼女らしく変身したのである。

その日は、小雪が舞っていた。
美香と待ち合わせたのは、街外れのカフェだった。
いつか行ったフレンチレストランで着けていた同じテンのファーだったが、ボトムスはジーンズであった。そんなところにも美香が男っぽくなったのが垣間見える。
中条の部屋はいつものように、冷されたシャンペンが置かれていた。
飲みながら話始めたが、その話がよく噛み合わない。美香の自己主張が強く、“温度差が

違ってきたのだろうか”と中条が唖然とする場面もあった。
しかし、セックスについては、意気投合していた。そして、二人の心には、いつか二人で観た映画“愛の嵐”のようなある種の快楽の悦びが去来していた。
酔いが回った美香は、中条の躯を求めた。中条も同じように美香の躯を求めた。
ベッドインし、一時間ばかり交わった。美香の女の性（さが）が蘇ったようである。
美香は自立し、成熟した女になっていた。男っぽいのに。
一緒に堕ちてゆく悦び、快楽を得たのだ。セックスに於いても自己主張しているようだ。
「別れる時には、パワーが要ったが、今こうして逢っていると再会と言うのは、それほどパワーが要らないね」
「じゃ、これからもこうしようか」
「……」
中条から美香えの呼び名は、再び、「美香さん」に変わっていた。
「美香さんは、私の理想の女になった。今後もお付き合いしたい」
美香は、理想の女とはと、中条に尋ねた。
と、中条は、男女の仲をこう語った。
「男にとって、女には、自分の最初の男であって欲しいと願っている。女にとって、男には、自分が最後の女であって欲しいと願っている」
美香は、苦笑して、
「あなたは自信家だ。自惚れが強い。本当に私は理想の女か」
美香は、詰問を続けた。

「あなた好みの女だって？」
そこまで言われた中条は、白旗を挙げざるを得なかった。
それは、虚実の闘いであったかも知れない。

「愛している女は、男から愛されていないかと、いつも恐れている。愛していない女は、男から愛されていると、いつも自惚れている」ディワイェ

終章

梅の花が、綻び初めていた。
永く臥せっていた父に訃報の電話が届いた。死因は直腸がん。
和歌山に帰った美香は、葬儀を終え、中学の同級生とお茶していた
「美香ちゃん、あんた、色っぽくなったやんか。どうしたんだ。いい男でも、出来たんや

ちゃうか」と親友が驚愕したように言う。
美香は、図星が指された思いだった。中条の存在が自分をこのように変えたのだと。
養翠園に佇んで、女の幸せとは、何かと考えてみた。
・愛すること。
・愛されること。
・誉められること
・他人や家族、社会に役立つこと。
・働くこと。
・自活すること。
あの辛苦の生活を乗り越えて来た美香は、そんなことを考える事が出来る美香になっていた。
「草履道」を地で往ったようである。

三歳の頃から、日本舞踊を習い、中学を卒業して、ＳＫＤの入り、中堅スターまで昇って、年下の男と結婚。一人息子を設け、パートタイマーとなり、そして、もう一人の男と出会う。
自分の心と葛藤しながらも、その男を愛し、女としても真の性に目覚め、歓喜、悦楽を味わう。その男と別れようとするが、自分が成熟したと感じ、それが、待ちに待った春が訪れたと信じる。
「始まった事は、終わる」と言うように一時は別れ行く。
だが、愛と性の歓喜が忘れられず、再び、その男との逢瀬を重ねる。
そんな人生に納得し、豊穣を感じている美香は、もう、今となっては、引き返す道が存在しないだろう。
美香の心境はこうだ。
「気のむくままにいきて、
気ままな恋をして、
誰にも縛られぬ
気ままな恋を。
だいそれた夢を見ていない。
何が欲しいかと聞かれて、
お金が欲しいと答えて、
幸せかどうかわかりはしない。
何が望みかと聞かれて、
幸が望みと答えて、
たとえ幸になれても、

きっと昔が懐かしくなる」
マレーネ・ディトリッヒが、唄うように。

―了―

参考文献

「日本舞踊の世界」西方節子著、講談社刊
「秘すれば花」、世阿弥・渡辺淳一著、サンマーク出版刊
「冶酒がわかる本」、蝶谷初田著、三一書房刊
「もっと素敵な愛しかた」パム・シュペー著深井美子訳、KKベストセラーズ刊
「快楽進化論」「快楽する頭脳」、大島　清著、文社刊
「檀流きもの道」、檀　ふみ著、世界文化社
「中年は恋愛適齢期」、海老坂武著、講談社
「同じ顔を……」、朝倉ふみ著、ACT三百八十号
「着物は日常」、飛騨和緒著、主婦を生活社

http://www.ne.jp/asahi/nd4m-asi-jiwen.innternational/fitel.htm
http://www.edo.net/edo/asakusa/09rekisi/men05.html
http://www.cool.runnings.net/e-kotoba/meigen-dd/mignshul.htm
http://www.rakuten.co.jo/wadaya/108225/109188/#109894
http://ratei.health.yahoo.co.jp/katei?=main&bs=05&sc=ST080010&dn=3

参考映像

「愛の嵐」リリアーナ・カバーニ監督作品

井本正弘